

Kyushu Sangyo University  
九州産業大学美術館  
Museum of  
Kyushu Sangyo University



令和3(2021)年度文化庁「大学における文化芸術推進事業」  
「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業実行委員会  
編集: 緒方 泉 (委員長・九州産業大学地域共創学部教授)  
デザイン: 小野 勝也 (有限会社 フォース)  
発行日: 2022年3月30日  
印刷: 東洋紙業高速印刷株式会社



博物館が、人々を支える。

M u s e u m

令和3年度 文化庁「大学における文化芸術推進事業」  
実施報告書

「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業実行委員会  
(九州産業大学美術館<代表>、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海の中道海洋生態科学館、田川市石炭・歴史博物館、直方谷尾美術館)

## 本事業のねらい・趣旨

英国やカナダなどの医療保険制度では、医療従事者(主に医師)が地域のリンクワーカーを介して、患者へ適した博物館などの社会資源が行う教育プログラムへの参加を、薬と同じように「処方」できることがある。ところで、日本では団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、団塊ジュニア世代が全て高齢者になる「2042年問題」が浮上し、勤労世代の減少、社会保障費の増大が大きな課題である。

そこで、本事業では、英国、カナダ、米国、台湾などの先進事例調査をもとに、高齢者の「健康寿命」増進プログラム開発、そして医療従事者と高齢者、博物館などをつなぐリンクワーカー人材育成を目指すことで、「2042年問題」解決に向けた社会資源の新たな活用方策＝社会的処方場となる「博物館健康ステーション」運用、さらに地域の高齢者医療の新たな枠組みを提案したい。 1

## 本事業の実施概要

1. 博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発講座(博物館などの社会資源を活用した、回想法、園芸療法などの「健康寿命」プログラムの体験、そして企画立案・実施運営の方法を学ぶ講座)
2. 博物館リンクワーカー人材養成講座(博物館などが社会的処方場となるための理論と実践を学ぶ講座)
3. 博物館のリラックス効果に関する実態調査(リンクワーカーが見つないだプログラム参加者への生理測定、心理測定による効果評価の調査)
4. 海外博物館、美術館などにおける「健康寿命」増進プロ

グラム及びリンクワーカーのオンライン実態調査(海外の先進事例を調査し、今後の方策を検討する)

5. 海外の博物館関係者、リンクワーカーを招聘したオンライン国際シンポジウムの実施(海外事例の紹介、及び関係者の交流の場とする)
6. 多言語映像資料の制作(海外博物館、美術館などに向け、英語版「仏像の取り扱い方」などを制作する)
7. 実行委員会の開催(3部会①調査研究部会、②プログラム開発・評価検討部会、③教材開発部会を設置)

2

## 本事業による人材育成の目標

本事業の目的は、博物館を社会的処方場とし、「薬」だけに頼らない地域医療(＝地域包括ケアシステム)の構築を目指すことである。そのためには、「健康寿命」増進プログラム開発と医療従事者と高齢者、そして博物館をつなぐリンクワーカー人材育成が鍵となる。特に、リンクワーカーとなる人材には、高齢者医療、高齢者心理、高齢者の運動、生活支援、博物館の実態、教育プログラムの企画立案など、そ

れぞれを「つなぐ」多彩な学びが求められる。こうした人材の育成は、地域に社会的処方場としての博物館を増やすことになると同時に、リンクワーカー自身の健康寿命増進に結びつくことも期待できる。さらにリンクワーカーの活動領域が博物館だけでなく、学校や図書館、公民館等、多様な地域の社会資源に拡大することも期待できる。 3

## 本事業の社会的な役割、効果

高齢者は概ね、健康な高齢者、虚弱な高齢者、要介護な高齢者を経て、天寿を全うしていく。現在、健康と要介護状態との中間の時期に位置する虚弱な高齢者は、筋力や心身の活力が低下する段階という意味から「フレイル」と呼ばれる。「健康寿命」を増進するには、この「フレイル」段階に適切な介入があると、健康状態に戻すこともできると言われている。高齢者の健康の秘訣は何か? 1つ目に体操・運動

2つ目に食事、栄養、そして3つ目に社会参加があげられる。

従って、本事業で英国、カナダ、米国、台湾などの先進事例調査をもとに、地域の社会資源である博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発などを進めることは、「2042年問題」で焦点となる社会保障費増大を食い止める効果が期待できる。 4

## 組織体制

### 実行委員会名簿

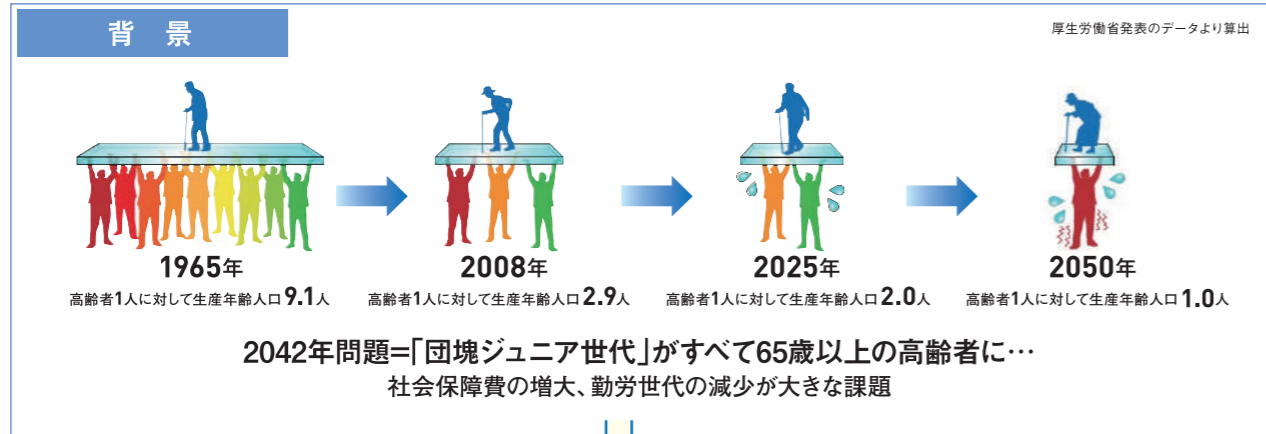
- 委員長 緒方 泉 (九州産業大学美術館・館長/  
九州産業大学地域共創学部・教授)
- 副委員長 三島美佐子 (九州大学総合研究博物館・准教授)
- 委員 朝鳥 和美 (田川市石炭・歴史博物館・学芸員)
- 委員 市川 靖子 (直方谷尾美術館・学芸員)
- 委員 鬼本佳代子 (福岡市美術館・主任学芸主事)
- 委員 松村 利規 (福岡市博物館・学芸課長)
- 委員 塚田 仁次 (海の中道海洋生態科学館・運営本部展示部  
海洋動物課係長)

### 事務局名簿

- 事務局長 中込 潤 (九州産業大学美術館・学芸室長)
- 事務局次長 永井 浩一 (九州産業大学産学連携支援室・課長)
- 事務局員 織田 珠未 (九州産業大学産学連携支援室・室員)
- 事務局員 吉田 公子 (九州産業大学美術館・准教授)
- 事務局員 三戸 丈治 (九州産業大学美術館・学芸員)
- 事務局員 門井 慶介 (九州産業大学美術館・学芸員)
- 事務局員 四ヶ所 悦子 (九州産業大学産学連携支援室・室員)



## 「2042年問題」解決に向けた社会資源を活用した「健康寿命」増進プログラム開発と社会的処方場となる「博物館健康ステーション」の運用構想図



### 本事業の概要

- ① 博物館などの社会資源を活用した高齢者の「健康寿命」増進プログラム開発
- ② 病院、医療従事者と高齢者、博物館などをつなぐ「リンクワーカー」人材育成

### 事業計画



大学・博物館・医療・福祉が協働する「博物館健康ステーション」の運用、地域の高齢者医療の新たな枠組みを構築

## 博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発講座

「博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発のための学芸員研修会」という名称で開催

### 【開催趣旨】

2015年11月、ユネスコ総会で採択された「博物館とコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告」の中で、「ミュージアムは社会全体に語りかけるゆえに社会的な繋がりと団結を築き、市民意識の形成また集团的アイデンティティを考える上で、重要な役割を持つ重要な公共空間である。ミュージアムは、恵まれない立場のグループを含め、すべてに開かれた、あらゆる人々の身体的・文化的アクセスを保証する場であるべきである」と提言している。

超高齢社会へひた走る日本は、団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、団塊ジュニア世代が全て高齢者になる「2042年問題」が浮上し、社会保障費の増大、勤労世代の減少が大きな課題である。

そこで、本事業では、今後社会的処方場となることが期待される、博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発の企画立案・実施運営の方法を学ぶ研修会を開催する。

カナダでは、「処方箋に博物館と書く」という新たな医療保健制度が始まっている。「知的刺激/学び/楽しみ/場」である博物館が、「リラックス効果の場=博物館浴の場」という新たな価値創造が可能になる「健康増進プログラム」を開発することで、地域の高齢者医療にどのように貢献できるかを、参加する学芸員が考える機会を提供したい。

\*博物館浴:博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果の人々の健康増進・疾病予防に活用する活動



### 研修会チラシの表と裏



表面



裏面

## 「博物館・美術館 de 園芸療法」①

### ■ 講師

岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究所准教授）  
専門分野：環境健康学

### ■ 講師から一言

園芸療法とは、植物の栽培といった一般的な園芸活動だけでなく、植物を用いたクラフトや庭園の散歩など、身近な植物を五感で感じることで、ストレス緩和や落ち込み・不安などの感情を改善するものです。本講座では、園芸療法の事例を紹介しながら、その効果や身近な実践方法をお話します。

### ■ 開催日時

2021年10月8日（金）10:00～17:00（9:30～受付開始）

### ■ 開催場所

佐賀県立博物館・美術館（佐賀県佐賀市内1-15-23）

### ■ 内容

●午前 09:30 受付開始、10:00 開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:20 講義「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」、11:50 周辺の森の散歩前の心理・生理測定、12:20 昼食

●午後 13:10 会場から周辺の森に移動、13:20 園芸療法プログラム1「岩崎先生の解説を聞きながら森の散歩をしよう」、14:20 周辺の森から会場へ移動、14:30 森の散歩後の心理・生理測定、14:50 休憩、15:05 園芸療法プログラム2「色々な豆を使った豆チャームづくり」、15:50 休憩、16:00 グループワーク「園芸療法を活用した博物館プログラムを考えよう」、16:30 グループ発表、16:45 ふりかえり、17:00 終了、解散

### ■ 受講者数

14名（佐賀9名、福岡3名、熊本1名、千葉1名）

### ■ 事後アンケート

#### 質問1

岩崎先生の講義を聞いて、印象に残っている事、興味深かった事をお書きください。

\*ミュージアム従来の目的だけではなく、それぞれの館が持つ魅力を生かしながら植物のセラピー効果を活用した地域の拠点として活動ができないかというのが印象に残りました。

\*園芸をみたり触れたりすることでストレスが軽減されることが、主観的だけでなく客観的に示されていること、実践が医療や博物館など幅広くおこなわれていることが印象に残りました。

\*散歩体験において、美術館の中から見る佐賀城公園の窓枠で切り取られた景色と、佐賀城公園から見る美術館側のクモの巣があちらこちらにあり、近づくのが怖いような景色の違いにショックを受けました。いつも佐賀城公園を散歩されている方々が見る美術館のイメージは、どのようなものだろうかと想像しました。

\*これまで漠然と緑はいい、と言っていた、思っていたことが、実際に数値で証明できる、という方法があることを知り、大変興味深く思いました。また、千葉の花壇のとりくみについては、花壇を通して地域住民が集い、自主的に運営しているという仕組みに大変驚きました。

\*緑を見ると今まで漠然と癒される感覚があったものが、実際に血圧や脈拍で数値としても、結果が出ているということが一番印象深かったです。自分の血圧や脈拍はあまり変化がなかったのですが、心理のアンケートでは明らかにポジティブな方に向いたもので、自然の力のすごさを感じました。

#### 質問2

ワークショップ「豆チャームづくり」を通して、気づいた事をお書きください。



岩崎先生と博物館周辺の森を歩く



豆チャーム作品の品評会

\*美術館ではおなじみの「素材遊び」を、豆という植物でやれると分かって視野が広がった。

また植物・生物・食育・デザイン・生活といった多面性に魅力があった。ただし食物は虫害の懸念があるため、美術館内よりも学校や老健施設などのアウトリーチに向いているかと思う。

\*実際に触れることで、視覚だけでない触覚の違いなどを楽しむことができました。また、それらを通して、何故同じ豆でも色や形にここまで差が出るのか、味はどうなのか、どのような構成にすれば面白いチャームが作れるかなど、考えるきっかけにもなりました。

\*植物をそのあと世話しなければいけない場合、やりがいを感じる方がいる一方で、負担に思う方もいるかと思うのですが、豆チャームは乾燥させた豆を使うことで、生き物を扱いながら保存性もあるという、植物の利点が活かされていました。何種類もの組み合わせを考えることで、クリエイティブな関心が刺激され、大人や子供、高齢者の方も楽しめると思えました。出来たチャームを眺めるだけでまた癒されます。資料館でのものづくり体験に取り入れられたらいいなと思えました。

\*これまで、豆に注目する機会がなかったので、不思議な模様の豆の存在すら知らなかったです。そして、豆でチャームをつくるという発想が面白いと思えました。食べるものとしか認識していなかった豆が、チャームを作るうちに、可愛く見えてだんだん愛着が湧いてきました。作る人によって、中身も変わるのでそれぞれの思惑が分かって楽しかったです。

#### 質問3

岩崎先生と一緒に館周辺を散歩した時に、先生のお話から気づいたこと、今までと違った散歩体験などをお書きください。

\*実際に散歩するなかで、遠巻きに眺めるだけでは気づかなかった植生や整備の様子、土壌をはじめとする環境に適した樹木があること、博物館施設との関係のなかで、内と外での見え方や一体感の重要性などを学ぶことができました。これまで目を向けていなかった、新しい視点を得ることができました。

\*自分の視点や意識を変えるだけで、景色から受ける印象が真逆になることに驚きました。佐賀城公園は人気の散歩スポットで、散歩体験の後に私自身もリラックスできたように、お客様もそのように感じられているのだと思います。そんなときに木が枯れていたり、クモの巣がはっていたりすることに目がいってしまうと、残念な気持ちになってしまうのではないかと気が付きました。

\*植物の状態から、道の使用状況がわかるというのは大変示唆に富んだ指摘でした。館の人間として、何も知らずに恥ずかしいくらいでした。また、一緒に館内で作品を見たときに、その国、その地域の植生について何うことができ、大変勉強になりました。鑑賞会で緑だけ見ていく、木を同定するというものをやってみても面白いかもと思いました。

\*景観を守るためには、木の特性にあった植生を作り出さないと、逆に景観が台無しになるということを感じさせられました。説明を受けながら周辺の散策をすると、今生えている植物が環境にあっていないものは確かに見るのも痛々しい状態もありました。また、それを踏まえて絵画を見た時に、植生に目が行くようになり、先生の説明でより、絵画にリアリティが増し、当時の環境を想像するようになっていました。

#### 質問4

今回学んだことを、今後の学芸員活動でどのように活かしていきたいですか？

\*美術館においては、植物をモチーフにした収蔵品を活用するほか、設置地域の自然環境を使ったワークショップないしは講座ができるのではないかと思います。しかし、生の植物を実際に使った活動となると、ミュージアム施設内はI P Mの観点から虫害が心配されるため配慮が必要となると思いました。地域の拠点としてミュージアムが健康増進に取り組むことの大切さを改めて実感しました。

\*自館の花壇がうまく使えていないことを個人的に課題とみていた。美観の維持に手がかかるため、職員に疎まれていたのも気になる。外から見た自館の印象を下げず、かつ、館の事業にも利用できる「使える花壇」にしてみたい。ハーブや枝豆で「刈れる花壇」にし、収穫物をワークショップに利用する、など。

\*博物館内の行事と博物館外の環境を連携させることで、来て帰るまで、全て楽しめるように取り組みたいと思います。そのほか、展示についても見るだけではなく、レプリカなどを実際に触ってもらうことで楽しんでもらえるように工夫したいと思います。

\*人が歩かない場所は芝が下りてきてしまうとおっしゃっていたように、人が立ち入る場所とそうでない場所で印象がガラリと違ったので、ワークショップなどで公園を活用するものを考案し手入れをすることで、藪のような印象を魅力的な森林浴の場所に变えることで、森林浴→博物館浴の動線を定着できればと思います。

## 「博物館・美術館 de 園芸療法」②

### ■ 講師

岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究所准教授）  
専門分野：環境健康学

### ■ 開催日時

2022年3月28日(月) 10:00~17:00(9:30~受付開始)  
\*当初、2020年9月2日(木)を予定。新型コロナウイルス感染拡大(第5波)により中止。日程調整の結果、2022年1月19日(水)に変更。しかし、新型コロナウイルス感染拡大(第6波)により再び中止。再度日程調整し、2022年2月26日(土)としたが、「まん延防止等重点措置防延長」で中止。再々度日程調整し、3月28日(月)に変更。

### ■ 開催場所

宮崎県総合博物館（宮崎県宮崎市神宮2-2-4）

### ■ 内容

#### ● 午前

09:30受付開始、10:00開会挨拶、生理・心理測定方法説明後1回目の測定、10:25講師紹介、参加者自己紹介、10:50講義①「植物のセラピー効果を地域ケアに活かす」、12:05休憩、12:10講義②「健康屋台や出前園芸などの実践事例紹介」、13:00昼食

#### ● 午後

13:45講義③「神社内の緑地を歩く心理的効果」、14:00園芸療法プログラム①「岩崎先生の解説を聞きながら森の散策をしよう」、14:50森の散策後の2回目の測定、15:05休憩、15:15園芸療法プログラム②「豆チャームづくり」、16:10プログラム後の3回目の測定、16:20休憩、16:25質疑応答、16:40ふりかえり、17:00終了、解散

### ■ 受講者数

17名（宮崎14名、福岡2名、千葉1名）

### ■ 事後アンケート

#### 質問1

岩崎先生の講義を聞いて、印象に残っている事、興味深かった事をお書きください。

\*最近特に観葉植物などの植物が色々なところで目につくようになりました。また、コロナ禍の中で植物の話題がSNSなどでも非常に多いなあと感じていました。これらもバイオフィリア効果の一つだと知り、バイオフィリックデザインなどにも興味を持ちました。

さらに、間接的園芸療法について、緩和ケアをする側のストレスケア、子どもを教育する側のストレスケア、とても大事だと思いました。今後、そのような視点でストレス対策ができればと思います。

\*コロナ禍における公園浴の広がり、バイオフィリア理論のお話は大変興味深かったです。

コロナによって健康意識が高まったことや、大学生との訪問園芸、看護学生との園芸プログラム等も幅広い活用で興味深かったです。

\*ホメオスタシスのバランスについて、緑の癒しが、心身機能回復につながることを証明されたことに感動しました。

\*全てが興味深いお話でした。その中でもレイズドベッドについては、地域とのつながりなどとても参考になりました。

\*ひとつのやり方ではなく、五感で自然に触れることで心も体も健康になる。ストレスの軽減だけでなく、地域のコミュニティー作りまで成し遂げられるというお話には大変興味を持ちました。今や子ども会も自治会も組織として衰退傾向です。昔のようなご近所づきあいもなくなりつつある上に、このコロ

ナ禍。ますます世代を超えたつながりは薄れつつあります。公園にハーブを植えて、好きな時に好きな人が関われる場を作られたお話は感激して聞いておりました。

\*単に育てたり、見て癒やされる園芸だけではなく、勿論これが一番の基本なのですが、訪問園芸…間接的園芸…出前園芸という『植物の力』を活かして、益々必要とされる所への普及やきっかけ作りはまだまだ無限大だと思いました。誰と、何処と、どんなふうに繋がっていけば…もっと心も身体も健康な人を増やすことが出来るんだろうと思いました！

\*病院、特別支援学校など様々な場所で実践をされているけれど、その実践にいたるまでの苦勞をお聞きできたのが興味深かったです。「現場が理解し、実践するのが大事」という先生の言葉が響きました。

\*ストレス社会といわれている昨今、ストレスを発散する機会をつくるのが大事です。そこで、最近園芸が注目されており、コロナ禍であることも相まって園芸をする人が増えてきていることに驚きました。そして、園芸療法の第一線で活躍されている先生のお話を伺い、とても多くのことを学ぶことができました。私が印象に残っていることは、緑の量よりも緑の質を重視することが大事だということです。自然に生えた木々はそれぞれ高さにばらつきがあるので、街路樹のように同じ高さでいくら木を並べても自然感は薄れるため、癒し効果が期待できないことは研修を終えて振りかえてみると、確かに街路樹では癒された実感したことは、あまりなかったなと思いました。

\*先生が早くから着眼され研究を進められていた分野が、このコロナ禍で社会的にその認識と重要性が高まっており、植物の持つ人々の健康機能への期待がさらに注目されているということについて、ちょうどその渦中にあるこの時期にお話を伺うことができ、より実感をもって研修に参加することができた。先生の強い信念と行動力に強く感銘を受けるとともに、その研究によって得られたエビデンスに基づいた効果には本当に驚かされた。そして、他大学や医療機関、自治体、学校など多くの機関に協力を得、連携し、いい意味で巻き込みながら前進し、目に見えた研究成果を出されていること、特にそれが人々の健康や幸福感につながっていることに大変感動した。

#### 質問2

ワークショップ「豆チャームづくり」を通して、気づいた事をお書きください。

\*豆の種類が沢山で、名前と表情、手触り、楽しめました。小

さな瓶に、自分のイメージ通り入れようと集中していたので雑念が湧きませんでした。育てて成長を見たいと思いましたし、どのような調理法で食そうか楽しみが出てきました。出来たチャームでグループでのコミュニケーションが弾みました。

\*豆チャーム作りを通じて、会話が広がり、参加者の回想法になることが分かりました。

\*豆チャームは、みんなで材料を囲んでできたら作成時会話が生まれるし、作った後も会話が弾み、とても良いワークショップだなあと感じました。できたら材料となる豆をみんなで育てた材料とすれば、更に素晴らしいワークショップになりそうで、可能性は無限大ですね！

\*サンプルで配ってくださった豆チャームを見たとき、正直なところ「なに、これ…」と思いました。小さな試験管に入った豆…といった印象でした。これを作ると言われても楽しいのか?と思いながら、たくさんの豆が入ったケースを開けましたら、見たこともない豆がたくさん。ここで一気にテンションが上がりました。ひとつひとつ手に取って、その感触を楽しみ、表情?を見るうちに、「どうやって食べるのか?」が気になり、ひとり携帯で検索しておりました。最初はあまり興味を持てなかったのですが、実際に見て、触って自分で作ることで、いつしか楽しく真剣に取り組んでいました。そして出来上がった豆チャームは、今でも見ると気持ちがほっこりするものに。先生が午前中にお話しくくださった園芸療法の効果を実体験できる機会でした。

\*あんなにお豆の種類を見たのは初めて!しかもまず、先生がワクワクしたからこのワークショップを作ったと言われたことに、とても素敵だなと思いました。説明書きだけでも読んで楽しんで…他にもどんなものでやったらって、アイデアが色々湧いてきました!

\*使う道具一つひとつが実践をもとに考えられていて、ストレスなくワークショップに没頭できました。

## 6-2

\*小瓶に豆などを入れるシンプルなワークショップでしたが、小瓶の中をどのように表現しようか考えたり、自分の思ったおりに豆を配置することが意外と難しかったり気がつけば、30分近くかかっていました。また、豆の種類も自分が見たことのない種類のものがあったり、模様も特殊なものがあり、見るだけでも楽しめました。道具に関しても実際に豆に触るためにピンセットではなく、爪楊枝を利用していたり、とても考えられたワークショップだったと感じました。私



講義風景(岩崎先生)



岩崎先生と博物館周辺の森を歩く

は今年、初めてワークショップの企画を考える機会がありましたが、どんなものをつくるか、小学生でも作れるか、体験者の安全面などに目を向けていました。今回のワークショップで作る過程で、物を見て触ることも一つの体験として捉えることの大事さを知りました。当課でも体験学習としてクラフトづくりをしているので、参考にしていけたらと思いました。

\*緒方先生もおっしゃっていたように、まず、先生の作ってくださったキットの使いやすさから、親身になって使用者のことを考えられ、試行錯誤されたであろうことが手にした瞬間にわかり、自分たちもワークショップ等を行う際に忘れてはならない姿勢だと感じた。作成してみると、頭の中で想像している仕上がりに近づけるには思っていた以上に頭を使い、指先も使うことに驚いた。自然と近くに座る方の作品も気になり、声を掛け合うことで笑顔になり、高いリラックス効果があることは自分でも感じられた。また、自分の作品を説明することも簡単なようで実は難しく、脳の活性化にも有効であるのではとも感じられた。楽しい時間であった。(最後の感想で述べさせていただいたが、反抗期の息子へお土産として渡した。まずチャームを手にして会話が盛り上がった。自分の部屋の「目に見えるところ」に飾り、時々手に取っている様子でこちらも嬉しい)。

### 質問3

**岩崎先生と一緒に館周辺を散策した時に、先生のお話から気づいたこと、今までと違った散策体験などをお書きください。**

\*これまでも、五感を使うはよく言っていましたが、足の裏で感じることを実感しました。今後の観察会でも話ができそうです。

\*木々の特徴を知ることで、緑との距離が近くなった気がしました。例えば、楠木は香りの力で生き残った、日陰の低木は一瞬の光でも光合成が行われるように緑が強い等、知ることによって森林浴効果が増すような気がしました。四季それぞれの感じ方の違いも楽しめること、緑の聴覚、足裏で触れるということ、実際に一緒に散策して気づかせていただいたことでした。

森の消臭効果のお話の後、マスクを外すとフレッシュな空気が体に浸透していき五感が研ぎ澄まされていく感じでした。これまではなんとなく気持ちよいと歩いていただけでしたが、意識することでより楽しく散策できると思いました。

\*森林を散策しながら、植物や自然界の法則を知ることで、森林浴の楽しみ方が増してきました。

\*足の裏の感覚に衝撃を受けました！これだけ歩いていたの

に…。あの話聞いた後にはだしになってみよ～なんて体験をしたら、一生忘れられない体験になりそうです。また、クスノキの話もなるほど～と樟脳の香り成分のもつ役割に納得しました。

\*植物の名前、その生態から、それらの木々、植物がどうしてこの場で成長しているのかなど考えたこともありませんでした。また、落ち葉を踏みしめる足裏の感触とその優しい音、言われて初めてそのここちよさに気づきました。一番は空気の香り？マスクをはずして思いっきり吸い込んだ空気は優しい、すがすがしい、甘い…。そんな香りを感じました。

\*足の裏から感じる…というのを意識したことが無かったので…なるほどと思いました。木の様子を見ながら…環境や木の説明をされている先生は…園芸だけではなく、幅広い分野の知識がありとても説得力があり楽しかったです。

\*マスクをとったとき、久しぶりに外で思い切りマスク無しで息をした気がしました。コロナ禍だからこそうした体験は益々必要だと思いました。

\*木々を管理する際もただ剪定するのではなく、その木にあった剪定の仕方を考える必要があるということに関して、私は今までそういう風に考えたことがありませんでした。今後は、樹木や植物を生かした景観をつくる際はまず、その植物や樹木を知ることから始め、その樹木や植物に合った管理をしていきたいと思いました。私は趣味で寺社仏閣を見て回ることが多く、よくリラックス効果や神秘的な感覚を体感しますが、今日の研修でデータとして実証されていることがわかりました。神宮と公園を歩いたときの感情の変化を比較する実験も心地よく感じている箇所が異なっていて、とても面白いなと思いました。また、実際に散策してみて、宮崎神宮は他の神社と比べて明るいとのことでしたが、十分癒し効果を感じることができました。

\*話を伺いながら散策したことで、自分ひとりでは気に留めることのなかったような部分に意識を向けることができ、大変新鮮であった。事前に見せていただいた公園散策との比較も思い返しながら意識して歩くことができ、あっという間に散策の時間が過ぎた(斑入り植物の話は、気になったことがあったので興味深く聞いた)。道が不便なことは決して欠点ではないということが目からうろこであった。祖父母宅が宮崎県総合博物館近くにあるため、幼い頃からよく訪れていた社叢だったが、改めて家族を連れ訪れ、先生に教えていただいた話を盛り込み歩きたいと思った。

### 質問4

**今回学んだことを、今後の学芸員活動でどのように活かしていきたいですか？**

\*先生の「関わらないと着想が生まれない」という話に感銘を受けました。その通りだと思います。あまりにも周りがやり過ぎるとかかわらないことで関心も示さないし、そこからの発想もなにも浮かばないと思いました。これからそのような視点で取り組みたいと思います。また、いつも同じパンフレットを配るのでなく、ちょっとしたアイデアや手書きのカードなどで取り組む気持ちがずいぶん変わりました。ちょっとしたアイデアを生かそうと思います。

\*今は多くの人に「緑による癒し」を伝えていき、繋がっていきける仲間を増やしたいと思います。特に岩崎先生のエビデンスに基づいたお話を多くの方に聞いていただけるよう、今日集まった方々と繋がりがつつ企画したいと思います。

\*地域の身近な自然に目を向けて、まちづくりの活動企画に取り組んでみたいと思いました。まちづくり協議会に、新年度企画を提案できそうな気がします。

\*是非、ハーブ栽培を館でチャレンジしてみたいなと思いました。来館者だけでなく、ボランティアのみなさんと一緒に育ててほしいなと思っています。

\*来年度、地域で身近な自然を楽しむイベントを計画する予定です。今回この研修で体験させていただいた、見て、触れて、聞いて、感じて、五感で楽しむイベントにしたいと思います。

\*美術館の中だけでなく、周辺の環境も考慮に入れて「博物館浴」を考えたい。

\*今現在やっていることは…全てそのまましっかり続けていけば良いと思ったのと同時に…まだまだ自信を持って訴えていこうと思いました！

\*都城市教育委員会文化財課が管理している施設のうち、都城歴史資料館があります。資料館内に植物を置くなどは難しいかも知れませんが、外にある庭園内の樹木・植物の管理や研修内でもあったレイズドベッドなど本研修で学んだことを生かしていきたいと思いました。また、関連する書籍などを読んでできそうなものを積極的に取り入れていきたいと思いました。

\*当日感想で述べさせていただいたが、管理運営する施設(都城歴史資料館)は、資料保護の観点から生もの、植物を設置することができない。ただ、その代わりに施設一帯の緑を活かしながら、地域ケアのステーションとしての役割を担うことは十分可能であると感じた。立地的に、高台に有る上に、道が不便で不利であると感じていた部分も、不便は欠点ではなく、むしろ五感に訴えるメリットがあると捉え、神社や公園、庭園、四季折々の植物に囲まれた環境をもっと多くの方に周知させることで、地域社会へ還元・貢献できるのではないかと感じた。そしてそのためには、地元の大学(環境園芸学科や子ども教育学科等を有している)や、同役所内の道路公園系・農産園芸系・福祉系などと連携することで、さらに深く具体的な活用法が模索できるのではないかと思った。自分たちだけでできることとしては、施設紹介や広報、展示紹介などの際に、ひと言「緑に囲まれた場所である」ことも付け加えてアナウンスすることが思い浮かぶ。まずは来てもらい、知ってもらい、興味のある人だけが訪れる施設ではなく、地域社会と共存できる施設でありたいと感じた。

## 6-2



生理測定(血圧、脈拍)



豆チャームづくり後のふりかえり

「恐竜博物館・美術館de音楽療法」③

■ 講師

井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科准教授）  
専門分野：音楽学/音楽療法

■ 講師から一言

音楽療法は、介護予防や健康増進を含む心身機能の維持・改善、行動の変容などを目的として、高齢者をはじめ幅広い対象に実践されています。美術作品によるイメージを基に、楽器を用いて「音・音楽に包まれる空間」を作り、その響きを共有するミュージック・アクティビティの体験を行いたいと考えています。

■ 開催日時

2021年10月11日(月) 10:00~17:00 (9:30~受付開始)

■ 開催場所

御船町恐竜博物館  
(熊本県上益城郡御船町大字御船995-6)

■ 内容

● 午前 09:30受付開始、10:00開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:20講義前の心理・生理測定、10:40講義「『音楽療法とは』」「音楽行動と社会」(活動内容及び楽器の奏法など)、11:40昼食

● 午後 12:30セッションI (グループごとの演奏) 流れの確認-展示資料の鑑賞、12:50鑑賞後の心理・生理測定、13:10①展示資料のイメージをどう表現するのか話し合う②使用する音階(音、楽器)、構成、演奏する場所(空間、配置)を決める③試演と準備(変更などがあれば行う)、13:50発表する各グループ5分以内-他のグループの演奏を聴取、14:10演奏後の心理・生理測定、14:30休憩、14:40ギャラリートーク、15:00ギャラリートーク後の心理・生理測定、15:20休憩、15:30セッションII (ギャラリートーク後の演奏)①流れの確認-展示資料の鑑賞②展示資料のイメージをどう表現するのか話し合う③使用する音階(音、楽器)、構成、演奏する場所(空間、配置)を決める④試演と準備(変更などがあれば行う)、16:10発表する各グループ3分以内-他のグループの演奏を聴取、16:25グループ演奏後の心理・生理測定、16:45ふりかえり、17:00終了、解散

■ 受講者数

8名(熊本3名、福岡4名、佐賀1名)

■ 事後アンケート

質問1

井上先生の講義で、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

\*厚生労働省から、エビデンスがない・数値がないと指摘されているとご教示いただき、音楽療法の医療効果を厚生労働省に訴えていたことも知らなかったため、音楽療法の動きについても大変勉強になりました。

楽器の紹介をしていただく際に、「この音は何かの泣き声にも聞こえますね」「雨の音で使われています」というコメントがあると、どうしても先入観を持ってしまっているので、あえて音だけ聞くのも良さそうかなと感じました。

\*感情や気持ちの何となくといった主観的な変化だけでなく、音楽による生理的・心理的变化をアミラーゼ活性やコルチゾール分泌量などで、数値として科学的に測定されているということ、また、細胞の活性や脳機能の検査まで行い音楽の効果が検証されているということが印象に残っています。

\*音楽療法には様々な手段があり、音楽は他領域とからめることができること。心に与える効果を示すには、エビデンスと地道な調査が必要なが、講義と測定の実践から伝わりました。「彫刻」「現代美術」「具象」作品の種類によっても、人々の感じ方(癒され方)が異なる事例が興味深かったです。

質問2

恐竜博物館での「鑑賞とセッション」について、あなたの中で起こった資料との関わりの変化(個人とグループの鑑賞方法、そしてギャラリートークでの気づきなど)について、感想をお書きください。

\*恐竜の行動や環境を音で表現するという課題であったため、ギャラリートークでも音をイメージしやすい情報を探して

説明をしようと思いました。

\*人によって全体を鑑賞していたり細部を鑑賞したり、さまざまな視点があるのだと改めて実感しました。

人の視点で改めて鑑賞し、資料または展示室全体に対して新たな気づきを得ました。

\*私個人が資料から受けたイメージや印象に残った部分と、他の人が受けたものは違うということを改めて感じました。同じものを見ていても、人によって感じた違いをすり合わせることで、自分が気に留めなかったことに目を向けることができ、資料についてさらに興味を持つことができました。

\*個人では、集中して展示を見る事ができ、ダイナミックな資料から、小さなものへと関心が深まったように思います。グループでは、他者とのイメージの共有によって、作品のよさや、見る角度の幅が広がり楽しめました。ギャラリートークはより自身と作品への親近感が湧いてくるように感じました。

質問3

仲間とともに過ごした時間(音を探る語り合いや即興演奏、言語的・非言語的コミュニケーションなど)について、感想をお書きください。

\*言葉で台本や役割をざっと決め、個人のイメージのままに音を鳴らし、でも最後はそれを合わせるためにコミュニケーションが生まれた。嫌なことを忘れ、ストレスから解放された。

\*初めて会う方との語り合いやコミュニケーションはもちろん難しいと感じたが、間に資料や音楽を挟むことで、そのコミュニケーションの難しさ自体も楽しいと感じました。

\*最初は自分がグループの中で、どのように振る舞うことが良いのか分からず緊張しましたが、「演奏をやる」という1つの目標達成を目指して、自然とコミュニケーションをとることができたと思います。

\*創作活動は、3名のチームでしたが、どの作品を取り上げるか・構成・使用する楽器などを、イメージや感性からまとめ上げて作ることは、難しさもあり、時間があつという間に感じました。演奏の純粋な楽しさや作る難しさも通して、楽しくグループで交流できたように思います。即興演奏は、楽器の響きと作品空間が一体となって、とても美しく、心に残りました。特に、他グループの演奏の鑑賞が心地よく、このような特別な空間で音楽を奏で聴けることはとても貴重な体験でした。

質問4

今回学んだことを、今後の学芸員活動でどのように活かしていきたいですか？

\*「社会的課題を解決することへの寄与」について、教育課題の解決は、博物館本来の役割の一部と捉えられ、様々な面で寄与できると考えられる。一方、今回の研修では、それ以外の分野にもその可能性があることに気づかされた。頭の中は整理できていないが、様々な社会的課題には何かしら関与できそうである。

\*社会課題に対する博物館の取り組みについて、より深く考えるきっかけになりました。短絡的に捉えると博物館とは関係のなさそうな課題でも、さまざまな視点から考えることで、活動の可能性は大いに広がると感じました。

\*今回、自分で体験してみて感じた楽しかったという気持ちや、達成感を伝えられるようなイベントを企画していきたいです。

\*鑑賞・創作活動を実際にやってみることで、熱中、安らぎ、爽快さなど様々な感情が生まれてくることを体感できました。博物館の資料や空間が、人の心を動かすことを改めて実感しました。感じ方が人それぞれの芸術作品であります。心に触れることが、まず「癒し」にもっとつなげていくために大事なことだと考えました。提供の仕方、切り口やつながりを大きくできるよう、視野を広げて心地よい空間づくりや業務の中で生かしていきたいと思っています。



講義風景(井上先生)



恐竜の骨格標本を前に即興演奏

## 「恐竜博物館・美術館de音楽療法」④

## ■ 講師

井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科准教授）  
専門分野：音楽学/音楽療法

## ■ 開催日時

2021年11月21日(日) 10:00～17:00 (9:30～受付開始)

## ■ 開催場所

三宅美術館（鹿児島県鹿児島市谷山中央1-4319-4）

## ■ 内容

●午前 09:30受付開始、10:00開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:20講義前の心理・生理測定、10:40講義「音楽療法とは」《音楽行動と社会》《活動内容及び楽器の奏法など》、11:40昼食

●午後 12:30セッションI（グループごとの演奏）流れの確認—絵画の鑑賞、12:50鑑賞後の心理・生理測定、13:10①絵画のイメージをどう表現するのか話し合う②使用する音階（音、楽器）、構成、演奏する場所（空間、配置）を決める③試演と準備（変更などがあれば行う）、13:50発表する 各グループ5分以内—他のグループの演奏を聴取、14:10演奏後の心理・生理測定、14:30休憩、14:40ギャラリートーク、15:00ギャラリートーク後の心理・生理測定、15:20休憩、15:30セッションII（ギャラリートーク後の演奏）①流れの確認—絵画の鑑賞②絵画のイメージをどう表現するのか話し合う③使用する音階（音、楽器）、構成、演奏する場所（空間、配置）を決める④試演と準備（変更などがあれば行う）、16:10発表する 各グループ3分以内—他のグループの演奏を聴取、16:25グループ演奏後の心理・生理測定、16:45ふりかえり、17:00終了、解散

## ■ 受講者数

13名（鹿児島8名、福岡3名、宮崎2名）

## ■ 事後アンケート

## 質問1

井上先生の講義で、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

\*ほとんどが初めて聞く内容で興味深かったのですが、特に、作品の性質（具象画か抽象画かなど）によって観覧者の感じ方が変わるという点が印象に残っています。今後、実証実験の結果が蓄積されていくと思われませんが、絵画や彫刻だけでなく、写真などさまざまな作品の形態がある中で、それぞれが観覧者にどのような効果を与えると判明していくのが気になりました。

\*絵を見てポーズをまねるとというのが意外に面白く、脳も体も動かすことができ、良い刺激になりました。絵を見てどんな音がみつかりますか？という問いも今までに考えたことのない問いで、新鮮でした。

一つの絵からさまざまな体験の方法があることに驚き、視覚と聴覚といった五感を2つ以上使うことの効果を非常に感じることができました。

\*能動的音楽療法が、軽度認知症に効果がある、という研究報告。隣接している特別養護老人ホームのデイサービス利用者は軽度認知症の方が多い。現在デイサービスでは楽器演奏や合唱と、美術館での作品見学をそれぞれ別のカリキュラムとして行っているが、今回の研修のようにこれらを融合させ一つのカリキュラムとして行ってみると、また違う効果が得られるのではないかと感じた。

\*美術館に限らず歴史博物館や動物園、水族館等の展示品から音楽を使って鑑賞の切り口が増やせるほか、音楽を演奏

することで身体を動かして内面に抱えているものを表出し、身体を整える効果があることがわかりました。

\*これまで音楽療法と聞くと受動的な音楽鑑賞しか思い浮かびませんでした。能動的な活動も認知症患者等に効果的であることを知りました。

\*講義の中でもあったとおり、音楽療法などの手法は、アルツハイマー型認知症など重度の患者の症状を緩和させるというイメージが強かったのですが、予防という観点から音楽療法を取り入れていこうという視点は、音楽療法の裾野が広がりをみせているのかなという印象を受けました。また、研修のあと、最近弾いていなかったピアノを久しぶりに弾いてみました。曲調が違う曲を弾いたときにどう感じているか、弾く前後で気持ちが変わっているかなど、今回の講義を聞いて客観的に考える意識付けができたので、自分自身の健康管理の中にも取り入れていきたいと思いました。指は全然動きませんでした。

\*作品の動きをまねたエクササイズを行うという発想が今までなかったのですが、確かにどの年代であっても作品の印象付けを行うことのできる、優れたアイデアだと思いました。当館は様々なポーズをとった人物画を多く所蔵しているので、ぜひ隣接する病院の入院患者様や施設入所者様対象にワークショップを行ってみたいと思いました。

\*音楽療法は楽器・歌唱・運動などの「能動的」プログラムと音楽聴取などの「受動的」プログラムを組み合わせるという点が印象に残りました。今回体験したプログラムも、鑑賞しギャラリートークを聞く、ディスカッションとセッションを行う、さらに互いの演奏を聞く、といった能動・受動を織り交ぜることで一方通行に終わらず、参加者の主体的な関わりが促され、結果的に達成感や充足感につながるのではないかと感じました。

## 質問2

美術館での「鑑賞とセッション」について、あなたの中で起こった資料との関わりの変化（個人とグループの鑑賞方法、そしてギャラリートークでの気づきなど）について、感想をお書きください。

\*絵画鑑賞は、静かに行うものという概念が吹き飛びました（通常は静かにですが）。作品から音がイメージされることはあっても、音を意識して鑑賞したことがなかったので、不思議な感覚でした。普段と違う鑑賞の仕方なので、最初は脳がこった気がします。自分のイメージと他人とでは、こうも作

品から受け取るイメージが違うのかと驚きましたし、楽しかったです。作品の世界が広がりました。

\*絵画を音で表現するという鑑賞法が念頭にあったため、正直なところ、鑑賞中はとまどいや緊張の方が大きく感じました。ただ、数日経った今でも、鑑賞した絵画のイメージが強く残っているように思います。

\*絵に囲まれた静かな空間にまず癒されました。そして、少しずつグループ内の結束ができあがるにつれてリラックスが高まってきました。個人で見ると、ギャラリートークを聞きながら見る、グループで語り合いながら見る、この順番で見たことが癒し効果を最大限に発揮できた気がします。

\*作品を目の前に互いの感想を述べあうことで、一つの作品が放つ要素がどれだけ際限ないのか実感することができました。他の方が作品から何を感じ、どのように理解したかを知ることが、より深く作品を理解するための一助となり、楽しく鑑賞できました。そして、自身の作品、作家に対する固定観念に気付かされた。

\*音楽を演奏する音を聴くという切り口で、作品を鑑賞することができました。グループによってはビニール袋、ペットボトル、クリアファイルを使用するなど楽器に限らない表現をするところもあり目から鱗でした。水族館でする場合であれば『ビーチコーミング』を行なって、浜辺のゴミから出る音を再現するのはどうだろうかというアイデアの発表もあり実情に合わせてワークショップができるなと思いました。

\*知らない方たちとの活動、発表と緊張の連続で正直リラックスすることはありませんでした。グループ鑑賞ではやはりそれぞれの視点の違いを実感しました。

\*個人では頭の中になんとも浮かんだイメージを言葉にすることが難しかったのですが、他の方の意見を聞いていると共感できる部分とできない部分と出てきて、自然と自分のイメージを言葉にして話していたことはとても興味深く感じました。また、その共感できない部分もお話を聞いていくなると感じるし、このような過程が作品への理解をより深いものにしてくれるのかなと思いました。

6-4

\*私個人のリラックス効果としては、先ず個人での鑑賞の際は、作品から受けたイメージを何としてでも音にしなければならない、と強迫的に考えてしまったため、リラックスというより逆にプレッシャーを感じました。その後グループでの鑑賞



一人一人、作品から聴こえる音を探す



3人が楽器を持って、作品イメージを即興演奏する



時に移ると、作品への印象を音に表現することを難しく思う感情を共有でき、また今まで自分が思い至らなかった作品への気づきを得られたことで一気にリラックスしました。

\*美術学芸員である自分にとって、作者や作品の知識にとらわれることなくフラットな感覚で鑑賞できたのは学生時代以来といえるほど本当に久しぶりで、それだけで既に固定観念から解放されるような心地よい体験でした。ギャラリートークでは改めて背景を知ること、個人観賞の際には目にとめていなかった作品への理解と親しみが増し、さらに、様々な分野の学芸員の方とのディスカッションは新たな視点を得るきっかけとなりました。音楽のセッションでは演奏と聴取という能動・受動の両体験を通じて、達成感・充足感に加え、音からの癒し・リラックス効果を確かに感じる事ができました。

### 質問3 仲間とともに過ごした時間(音を探る語り合いや即興演奏、言語的・非言語的コミュニケーションなど)について、感想をお書きください。

\*初めてお会いする方もいらっしゃいましたが、非常に楽しく自分の意見を伝えたり、相手の意見を聴いたり、とても有意義な時間でした。絵を音で表現することの難しさをグループ全員で共有しました。それぞれ違うイメージや音を否定するのではなく、どうしたら音として表現できるのか、音を作り出すために様々なものを物色したりと、楽しかったという感想以外ありません。

\*グループのメンバーで異なったイメージがでるのではと思っていましたが、互いに感想を話していくうちに「これしかない」と思える共通のイメージができあがってきたのが意外でした。自分だけでは気が付かなかった点を共有できたことが楽しく、今回と違ったメンバーや作品だどのよう感じるだろうかと気になりました。

\*同じことに興味がある仲間というのが心理的な安心感を生みました。安心感のある空間で音を出すということがとても楽しい経験になりました。絵を見ながら感じたことを音にするとということにさまざまな感覚が刺激されました。

\*ダイビングを趣味としているので、私自身サンゴの作品からはリアルな海中の音が聞こえてくるが、グループ3が奏でた音を聞いて、海に潜らない人は自分と正反対の印象を受けていることを非言語的手段で理解することができたことは新しい発見、感覚だった。感情、感想を伝える手段として、言語以外でも十分伝わることを実感できた。

\*グループによってビニール袋、ペットボトル、クリアファイルを使用するなど楽器に限らない表現をするところもあったこと。水族館でする場合であれば『ビーチコーミング』を行なって、浜辺のゴミから出る音を再現するのはどうだろうかというアイデアの発表もありました。対面だからこそ、参加者の即時的なアイデアが出てくるのが良かったです。

\*他の2班に比べるとストーリー性や状況設定も特にないため、自由な発想で意見を出しあえました。その自由さが心地よく、音探しも楽器以外の身近なものなど工夫しあえ、久しぶりに涙を流して笑いました。

\*あれこれ意見を出し合いながら仲間のそれぞれの考え方を組み合わせる過程は、よくよく考えてみればつぎはぎだらけのものが出来上がりそうに思うのですが、出来上がったものを演奏してみると、意外とちゃんと聞こえるということに驚いたように思います(もちろん、ある程度はストーリーを作ってから取り組んだからということもありますが)。また、こんなにオトマトペを使って話すことがなかったので、オトマトペが主導権を握る会話を純粋に楽しむことができましたし、たくさん笑うことができました。

\*私は「作品から何としてでも音をピックアップしなければならない」という思考に囚われていたのですが、グループ発表で逆に「無音を表現しよう」との意見に出会ったことで、グループでの音楽表現を楽しむことができました。この経験から、普段自分が美術作品を紹介する際にも、意識して他者の視点を取り入れ、表現を豊かにしていきたいと思いました。

\*グループのメンバーはみな初対面であり、専門分野も楽器演奏の経験も様々でしたが、作品から感じるイメージを共有した後は、自然と音楽のテーマや方向性が定まっていきました。自由に音遊びをするような即興演奏からスタートしても、短時間の練習である程度完成された形になったことに驚き、言葉以外で表現する非言語的コミュニケーションの力や可能性を実感しました。研修全体を通じて楽しく和気あいあいとした雰囲気リラックス感につながっていたと思います。

### 質問4 今回学んだことを、今後の学芸員活動でどのように活かしていきたいですか？

\*歴史系の展示施設ですが、よく考えれば、資料そのものが使われるときの音やそれらが作り出されるときの音など、絵よりもより多くの音であふれているのではないかと気づきました。メインの解説文には入れるのではなく、吹き出しのサブ

キャプションとして「ギコギコ」とか「カチカチ」とか「ネチョネチョ」といった音を入れると、資料の使われ方や作られ方がお子様にもイメージしやすいのではと思っている所です。

\*自分自身も含めて、受け身的な方法で作品を鑑賞が多かったと改めて感じました。今回の研修会では、音で表現するという方法を通して作品を深く理解するという経験ができたので、今後の学芸員活動の中で似た活動を取り入れていきたいと思っています。研修会と同じ方法では難しいかもしれませんが、展示資料をイメージする擬音語・擬態語を考えてもらう、その資料を使う時のポーズをとってもらうなど、自館でも工夫できることを探っていきたいと思っています。

\*職場である水族館にも応用し、水槽から音を見つけ出すというのを来館者とやってみたいと感じています。今回使用したトーンチャイム等は簡単に音が出て、また音もとても綺麗で癒されたため、使ってみたいです。また、手製の楽器から手作りして奏でるというのも楽しそうだと感じました。海でビーチコーミングした廃材で楽器を作り、水槽前で参加者と奏でてみたいです。

\*今夏の特別展で来館者にアンケート(感想)をお願いしたところ回収率は80%を超え、観覧者は感想をその場で表出したいと思っていることを確信したばかりだった。大人の場合、美術館では一人静かに作品を鑑賞し、そこで得た感情、感想は内に秘めて持ち帰るのが一般的だが、今回の研修で自身が表出する楽しさや満足感を得た体験から、なにかしら表出する仕組みを設ける必要性を感じた。

\*作品からどんな音がするだろうか想像の糸口を探るなど、視覚に頼りすぎない鑑賞をすることも大切だと思いました。楽器だけではなく、足音や手拍子、ビニール袋、ペットボトル、

クリアファイルなど身近なものを使って音を作ることができると教わったほか、音楽を上手に演奏しなければならないというプレッシャーを解放することも大切だと学びました。(鑑賞する人それぞれの思いを尊重する、というのでしょうか、)

\*美術も音楽もそれぞれの心理的作用は想像が付きませんが、それが掛け合わされた時の効果は単独よりも未知数の広がりを感じました。「療法」となると、更に実験や設定の厳格化などが必要かとも思いました。

\*今回、「音」や「運動」といった観点から創造的にアプローチすることの重要性をよく理解することができたのですが、さらにこれが心身にとってよい効果をもたらすのであれば、それは「心に残る美術館・博物館」として記憶の中に残っていくプロセスにもつながっていくのかなと思いました。これまで私も「心に残るようなもの(こと)を」と考えを巡らせながら博物館活動を行っていたように思いますし、今回の研修を通して実感したので、今はまだ企画立案できる立ち位置にはいませんが、また戻ったときには、それこそ今回の感覚を忘れずにいたいと思いました。

\*「博物館は健康に良いということを証明・アピールしていかなければならない」とのお話、当館は折角老人介護施設や病院に近い存在でありますので、ぜひ連携して健康に利する場所であることを証明し、地域社会にPRしていきたいと思いました。

\*心身への健康を提供する場という新しい博物館活用の在り方に今後とも注目したいです。鑑賞やワークショップなどの教育普及活動を言語/非言語的コミュニケーション提供の場としてとらえる視点を、プログラム内容に反映させていきたいです。



グループで即興演奏を考える



ギャラリートークを聴く

## 「博物館・民俗資料館de回想法」⑤

### ■ 講師

市橋 芳則（北名古屋市長史民俗資料館長）  
専門分野：博物館学

### ■ 講師から一言

回想法は、地域に暮らす高齢者を元気にしていくプロジェクトとして活用されています。博物館と高齢者ケア・認知症予防・健康推進などを推進する福祉関係の部局とが連携を図った「思い出ふれあい(回想法)事業」を2002年から実践しています。私たちは、これを「博福連携」と名付け、活動の軸の一つとしています。

### ■ 開催日時

2021年10月15日(金)10:00~17:00(9:30~受付開始)

### ■ 開催場所

時津町民俗資料館（長崎県西彼杵郡時津町野田郷62）

### ■ 内容

●午前 09:30受付開始、10:00開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:20講義前の心理・生理測定、10:40休憩、10:45講義「回想法と北名古屋市長史民俗資料館のこれまでの取り組み」、12:45昼食

●午後 13:35見学方法の説明、13:40一人一人、展示室などを見学(1回目)、14:15見学後の心理・生理測定、14:30休憩、14:40グループに分かれて、展示室などを見学(2回目)、15:10見学後の心理・生理測定、15:25グループで、刺激を受けた作品、風景、音などを紹介し合う、15:45見学後の心理・生理測定、16:00休憩、16:10演習「博物館資源を活かした、五感を刺激する回想法プログラムを考えよう」、16:35グループ発表、市橋先生講評、16:50ふりかえり、17:00終了、解散

### ■ 受講者数

12名（長崎8名、福岡2名、熊本1名、愛知1名）

### ■ 事後アンケート

#### 質問1

市橋先生の講義や「回想法スクール、生き生き隊」の映像で、印象に残っていること、興味深かったことをお書きください。

\*高齢者の健康的な居場所づくりが達成されていることに驚きました。一回限りの活動で終わるのではなく、継続して活動することで交流を深め、活動後も参加者の自主的なグループ活動へとつながっていき、たいへん理想的なモデルケースだと感じました。高齢者の生きる活力となっているのが、映像で拝見した表情からとても伝わってきて感動しました。この地域に高齢の家族と住みたくなる魅力が大いにありました。

\*これだけの事業をうまく回せているのは、やはり保健福祉と博物館の両方の視点から制度設計をした点につきると思われる。保健福祉だけでは、例えば熊本県では「熊本さわやか大学校」として財団・事業化されているが、北名古屋市の高齢福祉課／歴史民俗資料館というサイズ感で運営されている点が個性的で興味深かった。

\*「五感」を使った回想法。匂いを通して脳が刺激されるというのが印象深かったです。生き生き隊のメンバーが講師となり、子どもたちに鑑賞の削り方を指導するという取り組みは、講師の回想法と子ども達の学習が叶う素晴らしい事業だと感じました。

#### 質問2

時津町民俗資料館での「個人鑑賞、グループ鑑賞」について、あなたの中で起こった資料との関わりの変化(個人鑑賞とグループ鑑賞の違い、そしてギャラリートークや市橋先生の解説での気づきなど)について、感想をお書きください。



ギャラリートークを聴く



一人一人、ゆったり鑑賞する

\*個人鑑賞前の声掛けに非常に感心しました。ひとことの声掛けだけで、ここまで鑑賞に対する集中力やスタンスの在り方が違ってくるのだと実感し、これはぜひ取り入れたいと思いました。また、一方的な解説の必要はなく、参加者の自主性やそれこそ無駄話を広げることの有意義さに気づかされました。

\*普段美術館では学校などの来館があると、対話型の鑑賞をすることが多いのですが、1人で誰にも話しかけられず、自分のペースで鑑賞ができるという安心感は代えがたいものがあるなと気づかされました。

またグループの鑑賞では、はじめは他館の方とどういう風に話せばいいかと緊張しましたが、最終的にはとても話が盛り上がり、最後まで資料館に残っておしゃべりをしていました。実際に使ったことがない資料が多く、でもアニメや映画で見たことがあるよねという会話になったり、案外その時代に生きていない私たちでも、何かしら物とのつながりがあるんだなあと思いました。

\*個人鑑賞で資料と向き合った上でグループでの鑑賞だったので、自分の理解を踏まえた上でグループの話の聞くと、より皆さんも思いにも向き合えたような感じがした。その人の背景が一瞬見えたような感じもあり、回想法スクールを体験しているような気持ちだった。先生の解説をお聞きして、対象者のことを事前に把握することが重要とも感じた。

#### 質問3

仲間とともに過ごした時間(コミュニケーションから生まれた新たな気づきなど)について、感想をお書きください。

\*美術館や博物館の性質上、実際にモノに触れられない、五感を使って作品を楽しむことが難しいという話題になりましたが、それぞれの館で様々な工夫をされていると聞いてとても参考になりました。ほかのグループの意見でもでた三世代の鏡を持ち寄って鑑賞というのもとても素敵なアイデアだと思いました。

\*同じ事に関心がある仲間とコミュニケーションを取りながら話すのは、非常に楽しかった。今回は同じ受講者という仲間意識が芽生えたが、回想法でもいかに思い出を共有できるモノがあるかが重要かもしれないと感じた。

\*ボランティアの高齢者など、実際に使ったことがある人の説明や思い出の話は説得力が違うので、博物館側としてもテキストとして活用できるのでは、という意見もありました。それを使っていた人の体験や思い出が結びつくことで資料は生き

てくるということ、思い出話そのものの重要性を語り合うことができました。説明板は素通りされてしまったり、逆に資料を見ずに説明だけ読んでいることもあるとの悩みも話し合いました。各館の悩みから、展示の工夫につながる話ができました。博物館側から解説するだけではなく、来館者からのアクションができるような取り組み、感想やそれにまつわる思い出を語り合っただけで回想法を取り入れられるイベント、高齢者のボランティアとしての参加など、皆で考えることができました。

#### 質問4

今回学んだことを、今後の学芸員活動、博物館活動でどのように活かしていきたいですか？

\*美術館のボランティアさん向けに、こういった回想法を美術作品で実施してみたいと思いました。コロナ禍でしばらく会わないうちに、体力的にも精神的にも元気がなくなっている方もおり、まずは集まって、親しい仲間とおしゃべりする機会がとても必要とされている時期のように感じます。

\*これまで年配の方を対象にする場合、講演会や案内など伝えることが求められていると思っていたが、語り合うことができるモノや場を提供することも博物館活動として出来ることが分かった。地域連携というと伝統芸能の紹介やお祭りの誘致など特別なことをイメージしていたが、今回回想法を知ることができたので、回想法を使ってどのように地域の高齢者と連携できるのか検討していきたい。

\*地域の年配者の方に展示している道具に関すること(使い方やエピソードなど)や地域に伝わる情報などを聞き取って記録し、生の実体験を子どもたちに伝えられるようにしたいです。また、回想法を取り入れた異世代間の交流事業にも今後取り組んでいきたいと考えています。

\*来館者が展示を見ることにより、どう自分の思い出を想起できるか、印象に残るかを意識していきたいと思います。解説するときは来館者からのアクションを意識することも大切だと感じました。昔の農具は、今の人々には想像しづらくなっているというお話もうかがい、対象となる方々の世代を意識しながら、現在から過去の移り変わりをからめた説明をするなど、どう活用できるか課題としたいです。また、今後高齢者のボランティアの受け入れなどがあった場合には、健康と幸福感へつながる取り組みができるよう、博物館ができることを考えていきたいと思います。

## 「博物館・民俗資料館de回想法」⑥

### ■ 講師

市橋 芳則（北名古屋市長 歴史民俗資料館長）  
専門分野：博物館学

### ■ 開催日時

2022年1月13日(木) 10:00~17:00(9:30~受付開始)  
オンライン開催

\*当初、2021年8月25日(水)を予定。新型コロナウイルス感染拡大(第5波)により中止。日程調整の結果、2022年1月13日(木)に変更。しかし、新型コロナウイルス感染拡大(第6波)により対面開催困難と判断し、オンラインにて実施。

### ■ 開催場所

九州産業大学をホスト会場とし、オンライン開催を管理。恩納村博物館(沖縄県恩納郡恩納村字仲泊1656-8)のギャラリーツアーは携帯電話を使用して中継。講師は愛知県北名古屋市歴史民俗資料館からオンラインにて参加。

### ■ 内容

12:45受付開始、13:00-13:20開会式①主催者挨拶②参加者自己紹介、13:20-14:30講義「回想法と北名古屋市歴史民俗資料館のこれまでの取り組み」、14:30-14:50ブレイクアウトルーム(グループに分かれ、講義や事例紹介に関する気づきを共有する)、14:50-15:00各グループからの発表、15:00-15:20事例紹介「沖縄県恩納村博物館の取り組み、館内紹介」、15:20-15:30ふりかえり15:30-15:35閉会式

### ■ 受講者数

16名(沖縄11名、福岡2名、大分1名、宮崎1名、愛知1名)

### ■ 事後アンケート

#### 質問1

皆さんは、今回の研修会でどんな刺激、どんな気づきがありましたか？

\*博物館単独で終わらず、高齢福祉課など関連部署を巻き込んでいると継続的な回想法の取り組みを行えること……福祉部に予算を取ってもらい、博物館で事業ができるというのが、そして縦割りの行政でこれができるというのが驚きでした。当館でも、まずは担当部署に、回想法をしていることを紹介してみたいと思います。

\*博物館が高齢者福祉に貢献することができる方法として、回想法は非常に効果的であることが分かりました。北名古屋市歴史民俗資料館のすばらしさは、回想法を継続していることに加えて、その後も高齢者の生きがい作りとなるボランティアの育成に繋がっているところのだと実感しました。

また回想法を行う上で「最も大切なのは方法そのものではなく、高齢者の方々が「いかに楽しくその時を過ごすことができるか」なのだ」というお言葉は非常に印象的でした。

\*参加者のなかには「昭和」世代も多かったと思うので、市橋先生のお話しを通して懐かしさを共有できたと思います。年配の観覧者や回想法プログラムに参加される方々へ対応する際、昭和世代のスタッフなら「共感」による相乗効果が高まり、平成世代のスタッフなら昭和の記憶が「継承」される効果が期待できると思います。時代が下れば、このような集合的記憶もいずれは歴史資料になりますが、それぞれの時代にお



オンライン・ギャリートーク



オンライン・ディスカッション

記憶もいずれは歴史資料になりますが、それぞれの時代における人生や生活の「ときめき」を収集して活用する取り組みは、美術館・博物館の使命なのだと改めて感じました。

\*今回の研修会では、回想法を通して博物館が高齢者の交流の場となり、認知症予防・改善の効果も得られるというとても興味深いお話を聞くことができました。ありがとうございます。博物館の活動が、高齢化社会にこれほど貢献できることに驚きました。当館ではこれまで、玩具作り体験などのワークショップや昔の道具・写真の展示を行ったことがあり、世代間交流や地域資源の活用は意識していましたが、回想法までは意識が向いていなかったと感じました。観光地ということもあり、回想法を目的とした企画を行うのが難しい面もありますが、世代間交流の延長という形で少しずつ取り入れていきたいと感じました。

\*本研修を受けるまで、「回想法」という言葉を耳にしたことはあるものの、その中身についてはほんやりとしか認識していませんでした。

当館では、デイサービス等の利用者が来館されることがあり、それにあわせて昔の道具等の聞き取り調査を行うことがあります。その際、こちら側にだけ情報を得られるメリットがあると思っていましたが、聞き取られる側にとっても昔のことを回想することで、認知症ケアに繋がっていたこと、そしてある意味、私たちが知らず知らずのうちにやってきたことも回想法だったのだと気がつかされました。

回想法について学ぶ中で、これまでの当館の取り組みについて思い起こしてみました。

そうしたところ、地域の子どもたちを対象にした事業はあるものの、高齢者のみを対象にした事業があまりなかったことに気がつきました。

今後、例えば「祖父母と孫」を対象に、世代間交流ができるような事業が計画できたらと考えています。本研修で学んだことを今後の活動に繋げていきたいと思っています。

\*研修会を受講するまでは、大きな規模の博物館でない回想法を実践していくのは難しいのではないかと感じていました。しかし、さまざまな館の事例紹介を聞く中で、実は各館の特徴にあわせた方法を模索しているものだと知ることができました。

都城歴史資料館の場合で考えると、福祉行政や公民館と連携するなど、市直営の施設であることを活かした取り組みができるのではないかと思います。館についてだけでなく、地域の実情などに対してもアンテナをはりめぐらせていきたいです。

\*まず始めに受講して素直に良かったと思う。「回想法」は、これまで聞いたことない言葉だった。回想法とは何か。どんなことなのか。何をするのか。博物館や教育機関にとって、なぜ回想法があるのだろうか。と全く知識のないところからのスタートでした。

受講するにあたり、どんなことなのか意味が分からないと研修に参加する意味もないと思い、資料を読んでみたり、どんなものかインターネットを使い、事前学習を行いました。しかし文章だけでは、大体の内容は理解できて、すべてを把握できているのかという感じでした。市橋先生の話をお聞き、回想法が何なのか、どういう取り組みなのか分かり始め、他博物館や資料館は実際どのような取り組みを行っているのかを知ることができました。実際、自分の前職でも同じようなことを経験したことがあり、「あ、あれも回想法と同じことだったんだ」と思いました。回想法は博物館・資料館に限らず、それぞれの職種に合った回想法もあると分かりました。またグループ討論では、研修会に参加された学芸員の方の意見も聞くことができ、こういう取り組みもできたりするのかな、恩納村博物館でも取り入れられるものはないかと考えていくうちに楽しさを感じた自分がいました。

私は、学芸員資格は持ってはいませんが、博物館として今後、何が求められているのか、何を行ってほしいのか、職員同士で話し合うのもいいかなと思いました。職員、学芸だけではなく、子供から大人、高齢者の方々、みなさんを含め、枠を取っ払う。まずは「話す機会を作る」ということが重要なのではないかと思います。博物館に限らずですが、人々の笑顔を引き出せることが、とても重要な役割だと再確認することができた研修会でした。

\*講師の北名古屋市歴史民俗資料館の市橋先生の講義を聞き、「回想法」の実践が単に博物館施設での展示手法や見学手法というだけではなく、「博福連携」といった有機的な取り組みであること大変驚きました。行政機構型としての体制が構築されている北名古屋市の取り組みは非常に先進的なものであり、博物館のコレクション活用などの面からも理想的な活動だと感じました。

コロナ禍以前は高齢者施設、デイケアサービス、老人会等の団体の見学でも案内をすると割と好評であり、見学者への刺激にもなったという意見をいただくこともありましたが、今後はどういったアプローチが出来るかを今回の研修を参考にしていきたいと思っています。

また、オンラインでの館内紹介という初めての機会となりましたが、参加者の皆様に映像でお見せすることが出来て、とても嬉しく思っています。

## 「ユニバーサル・ミュージアム」⑦

### ■ 講師

広瀬 浩二郎（国立民族学博物館 准教授）  
 専門分野：日本宗教史・民俗学

### ■ 講師から一言

前半は、9月～11月に開催された国立民族学博物館の特別展「ユニバーサル・ミュージアム：さわる！“触”の大博覧会」の概要を紹介しつつ、「さわる展示」の意義と可能性について考えます。後半は、ワークショップ形式で実際に資料にさわりながら、「ユニバーサル＝普遍的」な博物館のあり方を参加者とともに楽しく議論します。

### ■ 開催日時

2022年3月7日(月)10:00～17:00(9:30～受付開始)  
 \*当初、2021年9月7日(火)を予定。新型コロナウイルス感染拡大(第5波)により中止。会場・日程調整の結果、会場を大分大学から国東市歴史体験学習館に、また日程を2022年1月24日(月)に変更。しかし、新型コロナウイルス感染拡大(第6波)により再び中止。再度日程と会場を調整し、2022年3月7日(月)、大分大学開催とした。

### ■ 開催場所

大分大学教育学部（大分県大分市且野原700）

### ■ 内容

◎午前 09:30受付開始、10:00開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介(コロナ禍で博物館、学校はどうなっているのか)、10:30 講義①「「ユニバーサル・ミュージアム：さわる！“触”の大博覧会」から考える「さわる展示」の意義と可能性」、12:05昼食

◎午後 12:55演習①室内でのさわる体験(形にさわる、音にさわる、匂いにさわるの実践)、13:40室内活動のふりかえり、14:10休憩、移動、14:20演習②屋外でのさわる体験(場所にさわる、音にさわるの実践)、14:50移動、14:55屋外活動のふりかえり、広瀬先生のコメント、15:10休憩、15:20講義②「記憶をどう記録するか」、15:50全体のふりかえり、広瀬先生のコメント  
 17:00終了、解散、片付け

### ■ 受講者数

11名(大分4名、福岡6名、大阪1名)

### ■ 事後アンケート

#### 質問 1

午前・午後の広瀬浩二郎先生の講義・コメントから学んだことは何ですか？

\*さわることで広がる世界の可能性を学びました。ユニバーサルやハンズオンと聞くと、身近なところでも目の悪い人向け、といった意味合いでとらえる人も多いと思いますので、視覚以外の感覚に気づいてもらう、モノを全身でとらえる見方というように、まずは私たちが意識して取り組んでいくことが大切だと思いました。

\*見える人にも触る活動を再認識してもらうこと。見えていることで分かったつもりでいて、気づいてない事を発見できる楽しみがあると思いました。また、触角。人間が生き物として持っている能力を呼び起こす効果があると気づかされました。

\*コロナ流行の影響で非接触が叫ばれる中、`さわる`行為を重視する展示の中で安心・安全を担保することから目に見えないものに触れる行為がいかに怖いことか改めて感じました。そして、視覚に頼りきって生活をしているか、他の感覚がおざなりになっているか改めて思い知りました。

\*広瀬先生の講義に関連して、視力が低下していった印象派の画家クロード・モネの晩年の作品が薄紫基調であったことを思い出しました。見ること、感じることは多様性があり、気づく訓練を受けて、常に感性を研ぎ澄ますことができているならば、見えている人よりも多くのものを見ることができると広瀬先生から学びました。『触る』ということは固定観念にとらわれることのない、そのまず第一歩ではないかと思います。従来の博物館が、いかに視覚依存であるかを考えさせられました。



講義風景(広瀬先生)



屋外のさわる体験  
 「場所にさわって、記憶をフロッタージュ作品に記録する」

#### 質問 2

今日は、「室内でのさわる体験」「屋外でのさわる体験」をしました。体験してみた感想、広瀬先生からのコメントでの気づきをお書きください。

\*「さわる」ことで広がる様々な可能性に気づかされました。モノまでのアプローチをどのようにするか、ものを包んでいたビニール一つとっても二重にする、色を変える、素材を変えるだけで、なかのモノがどのようなものか予想が変わっていくことが非常に面白かったです。

\*「室内でのさわる体験」：何重にもオブラートが重なっていると、手触りではわかりづらかったけれど、オブラートを減らす・直に触ると、手指の感覚で物体がなんであるか知ろうという気持ちがあります。湧きました。

「屋外でのさわる体験」：見た目では美しく感じたとしても、手触りを確認してみないと、その対象がトゲトゲ・ざらざらしているのかわからないことが多いと感じました。また、見た目だけではわからない美しさがあるのではないかと思います。

広瀬先生のコメントで、触角の`美`はまだ言語化されていない、共通認識がまだ研究されていないと言われていて、大変興味深かったです。

\*観察が当たり前ではなく、触って感じる体験をすることで、想像力や推理力が広がる体験をしました。さらに屋外では室内よりも自然環境がプラスされることで、光や温度様々な音などの意図しない情報が入ってくるのが分かりました。感性が研ぎ澄まされる感じを多く体験できました。また研修をご一緒した方々と、「さわる体験」を通じて、お近づきになれた感じもあります。広瀬先生の視点は「触文化」の豊かさを気がつかせてくれました。誰かが強者となるのではなく、「人がやさしい博物館」のお考えに賛同します。

\*室内でのさわる体験では様々なアプローチがあること…白いビニール袋、黒のビニール袋、重ねて使う、しゃらしゃらの袋、バリバリの袋、手触りと厚みが違い、そうすると中身の感じ方も変わってくるので、このような体験を子どもたちができたらいいなあと思いました。また、屋外でのさわる体験のフロッタージュとチェキは純粋に楽しかったです。ただ、広瀬先生のコメントから、作品の共有が難しいのだと思いました。

#### 質問 3

今回の研修会について、参加して良かったなあ、今後自分の館でこんなことができそうなあと思う点があればお書きください。

\*最近ではワークショップなどをする側がメインになっていたの

で、今回受ける側になって、インプット/アウトプットを繰り返す大切さを学びました。久しぶりに純粋に体験学習に取り組み、「研修楽しい!」と心から感じられたことが一番良かったと思っただけです。自分が楽しめない「楽しみ」を取り違えそうになるので、注意していきたいと思います。

\*SDGsの「インクルーシブ」と広瀬先生が言われていた「ユニバーサル」の違いの中で、既存の価値観を変化させながら、少数派にある人たちがアクセスできるようになっていくこと。そして、誰にとっても普遍的なものであること、と言われたことが印象に残りました。また、触角の「美」はまだ言語化されていない、共通認識がまだ研究されていないというお話から、視覚で認知する人間と触角で認知する人間が感じられる「美しさ」にどんな共通項があって、どんな隔りがあるか、研究ないしは研修会のテーマになると良いなと思いました。さらに、美術館でどんな取り上げ方ができるかなと考えさせられました。

\*研修会はコロナ禍で少人数でしたが、それが幸いし、リードする先生のお人柄のためか、梅の花が咲くような和やかで良い雰囲気でした。触る体験のある美術館、博物館はたくさんありますが、その意義や方法、そしてこれからの課題について考えさせられた研修会でした。特に現在、学校に勤務している私には「さわるマナー」について、身に染みしましたし、授業で取り入れるヒントをたくさんいただきました。どうしても「さわる」体験となると立体作品になりがちですが、様々な素材、音や匂いも含めて考えることができると思いました。

\*ユニバーサル・ミュージアムの研修会は数回参加させていただいていますが、毎回、新しいことに気づいたり、思うことが変化したりします。そうはいつてもやはり、さわることを純粋に楽しむことが自分には好きだな、と改めて思いました。その自分が楽しいことが人も楽しいとは限りませんが、同様に楽しんでもらえるように学芸員としても努力したいです。

\*私は、見えない見えにくい人と普通に見える人のコミュニケーションギャップを埋めるために、視覚で楽しんでいるものを何とかして、見えない見えにくい人にも楽しんでもらえる方法を模索したいです。

## 「美術館 de やさしい日本語」⑧

### ■ 講師

村田 陽次（東京都生活文化局都民生活部地域活動推進課）  
専門分野：共助・共生社会づくり  
高尾 戸美（多摩六都科学館）  
専門分野：博物館学

### ■ 講師から一言

ミュージアムにとってやさしい日本語を導入する意味とはどのようなことでしょうか？また館内外においてそれらはどう受け止められ、どのように展開すれば良いのでしょうか？当館の事例から皆さんの現場での取り入れ方をイメージし、在住外国人の方にやさしいミュージアムの第一歩を踏み出したい場面でできればと思います。

### ■ 開催日時

2022年2月21日(月) 10:00~17:00(9:30~受付開始)  
\*当初、2021年9月13日(月)を予定。新型コロナウイルス感染拡大(第5波)により中止。日程調整の結果、2022年2月21日(月)に変更。

### ■ 開催場所

福岡市美術館（福岡県福岡市中央区大濠公園1-6）

### ■ 内容

●午前 09:30受付開始、10:00開会挨拶、講師紹介、参加者自己紹介、10:20講義「多文化共生とやさしい日本語」(村田陽次)、11:20休憩、11:30質疑応答、12:00休憩  
●午後 12:40事例紹介「多摩六都科学館の取り組み」(高尾戸美)、14:00休憩、14:10質疑応答、15:00 福岡市美術館展示室見学の説明(福岡市美術館、鬼本佳代子)、15:10福岡市美術館展示室見学、15:40ワークショップ「博物館のワークシートをやさしい日本語で作成してみよう」ファシリテーター：緒方泉(九州産業大学地域共創学部)、16:20発表、講師による講評、16:55講師から受講生へ一言、17:00終了、解散

### ■ 受講者数

21名(福岡16名、熊本1名、東京1名/東京3名=オンライン参加)

### ■ 事後アンケート

#### 質問1

今回の研修会で、村田先生の講義から学んだことは何ですか？

\*東京都での「やさしい日本語」への取り組みが、考えていた以上に進んでいて驚きました。特に文化事業における取り組みが重視されていることが分かり、ともすれば文化後進国と言われる日本の文化施設で、このような動きが進んでいることがとても嬉しく思いました。

\*東京都では情報発信言語にやさしい日本語を希望する在住外国人割合が多い(思っていたより断然多い)ので、多言語対応だけでは十分でないのかもしれないと気づくことができました。日本語のどこに難しさを感じるのかや、「やさ日」訳のいろはを教えていただけたので、館に戻ってすぐ試しに身近な情報を「やさ日」に訳してみることができました。

\*在留外国人にとって、英語よりもやさしい日本語の方が理解しやすいという実態があることには気づいていませんでした。美術館の慣例では、日英バイリンガル表記に力が入りがちで、また国立館では中韓も含めた4か国語表記が当たり前になってきていることもあり、これまで外国語への翻訳を中心に考えてきたところがあります。利用者・対象を正しく把握する必要を感じました。講義では「やさ日」の基本的な考え方、日本語能力試験のレベルなど、具体的に学べてとても有益でした。それと同時に、「やさ日」自体の一般への浸透が不十分なため、普及の必要があること、アクセシビリティの面では「やさ日」が全てを網羅できるものではないことなど、ハードルや注意点をよく踏まえねばとも思いました。実践例も豊富にお示しいただき、非常に参考になりました。

#### 質問2

今回の研修会で、高尾先生の講義から学んだことは何ですか？

\*まずやってみる。トライ・エラー・フィードバックの繰り返しが「やさしい日本語」の取り組みを進め・広げる推進力になると分かりました。「覚悟」という言葉を何度も使っておられたのが印象的で、その上で、一人でも多くの理解者を巻き込んでいく大切さを思いました。「やさしい日本語プログラム」開催の様子を拝見して、逆説的ながら、言語以外のコミュニケーションの役割を再認識しました。図説やボディランゲージなど、いろいろな方法があること、いずれも根底にやさしい気持ちと「伝えたい」という熱意があつてこそ。だからこそ、対象者の反応に応じて修正していく継続性が重要だと思いました。

\*実際の取り組み例により、プロジェクトの起ち上がりからその成果までまとめられていたので、踏むべきステップが分かりました。また、ワークショップ等の実施例からは、対象の立場になって考え、試行錯誤を繰り返すことが秘訣と学びました。特に印象的だったのは、プラネタリウムでの「やさ日」が、外国ルーツの人だけを対象にしたところ、「排除」を感じさせるものとなってしまったこと。以後オールミックスに転換したら、日本語母語の参加者の理解にも役立ったというエピソードは、ミュージアム側の予想や意図を超えて様々起こるものだと知らされました。また、魚とりのフィールドワーク、「キッチンでカラーマジック実験」をムービーで記録しており、参加者のコメントとともに、スタッフの振り返りに非常に役立ちそうです。最後に高尾先生が、「覚悟をもって」と仰っていたことには姿勢が伸びました。

#### 質問3

午後のワークショップでは、福岡市美術館の5つの作品解説を「やさしい日本語」で作成しました。作成してみた感想、班で話し合ったことや講師からのコメントでの気づきをお書きください。

\*実際に作成してみて、第一に思ったのは「面白い!」ということでした。言葉を選ぶことは、その言葉の受け取り手をイメージして心を配ることであり、難しいながらも楽しい作業でした。専門用語は専門用語(固有名詞)として残すこと、見て分かるものは、そのイメージを表す言葉として理解してもらうことなど、単純に「やさしい言葉遣いにする」だけではない奥深さを感じました。

\*抽象的な文章(情報)を「やさ日」にする作業が非常に難しかったです。提供できる情報は限られるが、どこまで削っているのか、言い換えが適切か、やさしさは適切かなど迷うことが非常に多かったです。

言葉で伝えるににくい表現は、絵で表すことが有効だと実感できました。

\*実践的なワークで面白かったです。時間が許せば、もう一つか二つ、やってみたかったです(利用案内などを「やさ日」翻訳する実践から始めたら、肩慣らしになったでしょうか?)。外国語の翻訳に似ているところもあり、自身の語彙力が試されるなどと思いました。国語辞典や類語辞典を傍らに置きたいです。大きな気付きは、「やさ日」と子どもを相手にするときの言葉は少し異なるということ。子どもはオノマトペ、擬音語・擬態語が通じますし(例:分裂する→バラバラになる)、小学校3年生が理解できそうな単語でも、リーディングチュウ太にかけると「N2」ということもありました。注意しないと「やさ日」にはならないので、場数を踏む必要がありそうです。

#### 質問4

今回の学びを明日からの活動に、どのように活かしていきたいですか。

\*「やさしい日本語」切り口での鑑賞プログラムを作ってみようと思います。「やさしい日本語」による内容と目的を明示することによって、外国人向け、子ども向けというように対象を限定しなくても、それを必要とする人々が美術鑑賞に興味を持つきっかけを提供できるかもしれないと思いました。

\*自館では、視覚障がい者にとって来やすい施設になるような取り組みは多少行われてきましたが、「やさ日」を必要とする市民向けのものはそれ以上に少なかったなと気づかされました。定期的に行っているワークショップの掲示物から取り入れて、一回の取り組みで終わらないよう少しずつバージョンアップしていくことが当面の目標です。最終的には全面「やさ日」のワークショップを開催できるよう頑張ります。

\*まずは、熊本市(熊本県)の在留外国人の把握、言語ニーズのリサーチから始めねばとも思いました。正直、自館は外国人に気をまわした丁寧な運営はできていませんし、館スタッフの「やさ日」に対する理解や意識改革がスタートかと思っています。もし実際に自館で「やさ日」を導入するとしたら、東京都庭園美術館のムービーが参考になるかと思った次第です。自館はフリーゾーンに特徴や魅力があるにもかかわらず、利用者にあまり響いていないことがネックで、「やさ日」での館内案内動画があれば、この課題を解決することにもつながるかもしれません。ここ数年のパンデミックにより、デジタル配信関係については館の敷居も低くなりましたので、ぜひ同僚に相談して考えてみたいと思います。



講義風景(高尾先生)



グループ発表風景

## 博物館リンクワーカー人材養成講座

連続講座オンライン語り場「コロナ禍でも地域住民とつながっていく方法を考える」という名称で開催

### 【開催趣旨】

カナダの医師会は2018年10月から、患者の健康回復を促進する治療の一環として、美術館への訪問を「処方箋に書く」取り組みを始めています。医師会とモントリオール美術館が連携し、心身にさまざまな健康問題を抱える患者とその家族などが、無料で美術館に入館し、芸術文化の健康効果を楽しむことができました。

また、英国のウェストミンスター大学のAngela Clow氏は、ロンドンの労働者を対象に、昼休みにアートギャラリーを短時間訪問の前後で、ストレスマーカーとなる「コルチゾール検査」を行いました。訪問時はかなり高い値を示しましたが、見学後の数値は正常値に戻っていました。美術作品を昼休みの短時間に見ただけでも、ストレスの軽減になると報告しました(2006年)。

ところで、日本では団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、団塊ジュニア世代が全て高齢者になる「2042年問題」が浮上し、社会保障費の増大、勤労世代の減少が大きな課題です。

そこで、本事業では、カナダをはじめ、英国、台湾などの事

例調査をもとに、高齢者の「博物館浴\*」プログラム開発、そして医療従事者と高齢者、博物館などをつなぐリンクワーカー人材育成を目指すことで、「2042年問題」解決に向けた社会資源の新たな活用方策=社会的処方箋の場となる「博物館健康ステーション」運用、さらに地域の高齢者医療の新たな枠組みを提案したいと考えています。

今回の連続講座は「オンライン語り場」と名づけています。

新型コロナウイルス感染拡大が収まらない中、博物館などを活用しながら、高齢者をはじめ、地域住民とのつながりを粘り強く実践する医療従事者、大学教員、博物館学芸員からの話題提供を受け、その後は参加者と一緒に意見交換を行う「語り場」とします。

こうした「語り場」を通じて、地域の社会教育施設、医療・福祉機関が協働した「誰もが全国5,700ある博物館のリンクワーカー」という、新たな地域人材育成の方策やプログラム開発を考える機会としたいと考えています。

\*博物館浴:博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

### 何で、「連続講座オンライン語り場」なのか?



ほっとする90分を仲間たちと創りたい!

学びたい!、つながりたい!

リラックスしたい!

みんなの健康があって、博物館活動がある

### 【連続講座オンライン語り場】進行方法

各回の開催時間は13:00~14:30(90分)とし、基本的に最初の30分は講師からの話題提供、その後はブレイクアウトルームで4名程度のグループを作りディスカッション(20分)、各グループからの発表(20分)、最後に参加者のふりかえり、講師からのコメントを受け終了。

### 【開催方法】

Zoomウェビナー方式によるリアルタイム講座

### 第1回

## 「博物館浴研究の最前線」

#### ■ 講師

緒方 泉 (九州産業大学地域共創学部地域づくり学科教授)



#### ■ 講師から一言

英国、米国などで進む「博物館浴」研究の論文紹介や森林浴研究の実験方法を用いた「博物館浴」の実証データの紹介などから、研究の今と今後の方向性についてお話しします。

#### ■ 開催日時

2021年11月12日(金) 13:00~14:30(12:45~受付開始)

#### ■ 受講者数

27名

#### ■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

\*緒方先生が「博物館健康ステーション」を考えるにあたり、高齢者やケアワーカーの健康だけでなく、博物館で働く私たちの健康のために「語り場」を用意してくださったことをとても有り難く感じました。美術館・博物館がなかなか健康に良いよね、という感覚は前々からの自明のようで、研究自体はここ数年で急速に高まっているものであることは少し意外でした。

\*今回「博物館浴」という言葉を初めて知りました。海外の動向や研究成果を共有いただき大変勉強になりました。そして、自分がコロナ禍でもストレスフリーでいられる理由が分かりました。毎日、博物館で過ごしているからなのですね(笑)。とはいえ、誰かと話したい…との思いもあり「語り場」を求めて参加しました。

\*私自身、「博物館浴」という言葉に馴染みがなく、これからどんな可能性があるのか、さらに知りたくなる講義でした。また、博物館の効果について科学的なエビデンスが少ないということですが、科学的にどうなのかをそもそも考えたことがなかったため、新鮮な視点で考えることができました。

\*世界各地で、博物館浴研究が進められていること、社会的処方箋の場として博物館を考えるという視点、「成る程!」と思う話が盛りだくさんでした。

また、講座の参加者の方たちとの交流(しゃべり場)では、それぞれの専門と博物館浴への関心などを話す機会となり、今後の連続講座がとても楽しみになりました。

\*ブレイクアウトセッションでは、4名で話をしました。これから、高齢者福祉と何らかの取り組みをしたいと考えている方が多かったです。日常のなかで、高齢者施設を利用している方たちがミュージアムを訪れることはよくあることですので、まずはどんな出会いが作れるのかを共有できれば、取り組みへの障壁が低くなるように感じました。

\*緒方先生からのお話「博物館浴研究の最前線」で、自分が漠然と考えていたよりも、エビデンス検証の取り組みが世界各地でかなり進んでいるということがわかり、嬉しい驚きでした。

### 第2回

## 「オンライン博物館浴プログラムの実際」

#### ■ 講師

井上 幸一 (福岡女子短期大学音楽科准教授)



#### ■ 講師から一言

2021年4月から始めた、福岡県筑紫野市の介護施設職員向けの「オンライン博物館浴プログラム」。「作品de エクササイズ」「作品 de 即興演奏」「作品 de ピアノ演奏聴取」などを体験していただきます。

#### ■ 開催日時

2021年11月19日(金) 18:00~19:30(17:45~受付開始)

#### ■ 受講者数

26名

#### ■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

\*「絵画deエクササイズ」…非常に良かったです。当館所蔵の絵画や炭鉱夫の模型、兵馬俑レプリカ等でエクササイズを考案したいと思います。

\*セミナー第二回目も楽しく受講させて頂きました。絵画を見るだけでなく、そこから行動に移す手法があることは、とても参考になりました。

展示物のみでもらう際に、ただ見せるだけではなく、そこから行動や自分なりの工夫を引き出すことができれば、より深く記憶にとどめることができると気付くことができました。今後新しい展示をする際には、観覧者に語りかけるような工夫をしてみたいと思います。

\*第2回の講座、とても楽しかったです。リモートシンポジウムとあって、パソコンの前に緊張して座っていたら、突然のエクササイズで、身体がノビノビして、緊張もほぐれました。スリッパのまま斧を振り下ろしポーズをとったので、滑って転びましたが、裸足になって斧を振り下ろすと、スッキリしました。

リモートが多くてパソコンに釘付け姿勢の時に、アイスブレイク的なエクササイズで、今後もいろいろな場面で活用できると思います。これでほぐれたのか、今回の語り場ではほんとにスムーズにいろいろな意見が聞けて楽しかったです。アート作品のポーズをとるというエクササイズは、場を盛り上げるという効果もあって、年代を超えて実施できる楽しい試みと思いました。リモートを気にせず意見交換でき、本当に

よかったです。

\*絵画deエクササイズは、身体を動かすのにつられて感性もゆさぶられました。鑑賞するだけでは分からない絵の中の世界観を知る、感じる、考えるアプローチとして、とても良い手法だと思います。なにより健康に良いので一石三鳥くらいの効果がありそうです。

## 第3回

## 「台湾の博物館処方箋プログラムの実際」

## ■ 講師

中込 潤（九州産業大学美術館学芸室長）、  
施 燕（九州産業大学美術館学芸員）

## ■ 講師から一言

九州産業大学美術館調査を進める、国立台湾博物館の「博物館処方箋」についてお話しします。

## ■ 開催日時

2021年11月26日(金) 13:00~14:30(12:45~受付開始)

## ■ 受講者数

27名

## ■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

\*博物館処方箋プログラムの事例は大変勉強になりました。実際に現地へ行って体験してみたいです。(福岡へ行くより近くて安いですし。笑)プログラムの運営には、家族、介護スタッフ、博物館ボランティアなどのサポートとそれぞれの連携が必要だと思いますので、そのしくみづくりを勉強したいと思いました。

\*社会的処方、処方とは名付けられていないけれども、博物館に行くことの効用を実感されている方は、きっともう実行されているのだと思います。あとは、博物館が動くだけです。



\*台湾での試行(?)は、マニュアルまでしっかりできているので、素晴らしいと思いました。このような実施に至るまで、どこがリーダーシップをとって、どのように進めていったのか知りたいと思いました。

国立の博物館なので、国の施策としての一歩なのか?昨日のベルギーの情報でも、市議員の方が中心にいらっしゃるの。ある程度力のある方がリーダーにならなければ、プロジェクトを組むのも動かすのも難しいということを経験してきました。

この連続講座では沢山の方々と繋がり、情報を共有でき、同じ方向を向いて博物館浴プログラムが実施できそうな気がしています。

\*台湾での取り組み事例が進んでいるのか、日本の取り組みが遅れているのか、とても考えさせられる内容でした。ただ、文物に触れるために外出して刺激を得ることがストレスを抱えた人たちに有効であるという考え方が広まるのであれば、我々のような施設も提案の仕方をよく勉強しなければと感じました。

## 第4回

## 「認知症高齢者と社会教育施設をつなぐ」

## ■ 講師

竹下 一樹（大牟田市中央地区地域包括支援センター管理者）

## ■ 講師から一言

「地域住民が住み慣れた地域で安心して住み続ける大牟田市になるといいな。」という思いから始めたプロジェクトについてお話しします。

## ■ 開催日時

2021年12月3日(金) 13:00~14:30(12:45~受付開始)

## ■ 受講者数

26名

## ■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。



\*竹下さんのお話は、同じ認知症の方々に関わっていた者として重なる部分が沢山あり、スッと入ってきました。認知症当事者と共に作る街の風景のプロジェクトができて多くの社会資源を活用していることが素晴らしいと思いました。「その人と何ができるのか」はとても大切なことだと思います。語り場では、高齢者(認知症)と具体的にどのように繋がったら良いのか分からないとの声があったため、実践してきた博物館の活用例をお話したところ、皆さんとても積極的に考えて可能性を広げて下さいました。博物館浴プロジェクトができるかもしれないと嬉しく思いました。思いました。リモートを気にせず意見交換でき、本当によかったです。

\*絵画deエクササイズは、身体を動かすのにつられて感性もゆさぶられました。鑑賞するだけでは分からない絵の中の世界観を知る、感じる、考えるアプローチとして、とても良い手

法だと思います。なにより健康に良いので一石三鳥くらいの効果がありそうです。

## 第5回

## 「回想法で高齢者施設と博物館をつなぐ」

## ■ 講師

永田 文昭（宮崎県総合博物館学芸課主査）

## ■ 講師から一言

宮崎県総合博物館が実施する「博物館で思い出を語ろう!」という事例をお話しします。

## ■ 開催日時

2021年12月10日(金) 13:00~14:30(12:45~受付開始)

## ■ 受講者数

27名

## ■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

\*前回、今回と特に感じたのは、参加されている皆さんがとても熱心で、何かできることがないか真剣に考えていらっしゃることに感動しています。宮崎県総合博物館の回想法マニュアルがあれば取り組めるかもしれないとの声も聞き、直ぐできることとして回想法から博物館浴を始める所があっても良いのかなと思いました。

\*宮崎博物館の回想法の事例で、自然観察を用いた回想法が斬新だったです。回想法は民俗資料が主体と思っていたので、過去の環境や自然を回想して話すという事は、認知症対策とともに環境問題を考えるいい機会になると思います。今、都会のスズメの激減が問題になっていますが、スズメはもっともメジャーな鳥だったという事は昔話になっていくのかもしれない。グループでの語り場で、各館での回想法の提案で、天文台の方の星の思い出、星の行事(七夕や一番星、スバルや北斗七星の話など)で回想法ができるかもという話で、題材はなんでも工夫次第で回想法ができると思いました。動物園なら、初めて動物園に行った思い出などを語って回想法ができるなあと思いました。

\*回想法について体系的に学んだことがなく、来館者とのやりとりのなかで、意図せず(成り行きで?)そうなった、という経験しかないのも、とても勉強になりました。とにかく「マニュアル」があることに感動しました。認知症の方への声掛けや発問の段階など、本当に勉強したい!と思いました。沖縄は島嶼県で公共交通機関も乏しいため、気軽に博物館へ行ける人の方が少ないです。そのため、出前博物館など「機能」を持ちだすことが多いのですが、公民館(デイサービス)や介

護施設などで回想法を取り入れられると、もっと博物館を活用してもらえるのではないかと思いました。

\*宮崎県総合博物館の回想法は、館の方針に則って行われていることがすごいと思いました。マニュアルがあること、人から人への伝承がしっかり行われていること、民間との協働事業であることなど、どれも素晴らしい取り組みでした。

\*マニュアルを公開してほしいと思いました。博物館ごとに回想法で出来ることは違うとは思いますが、一つのモデルケースとして拝読したいです。

\*同時に、当館が貸出を行っているグループホームさんからきかれる、年代や地域の問題など、課題は同じだなと思いました。当館から貸し出した資料で回想法をしているグループホームの方からは、80代~90代の方で使っていた道具が違うため、既に例えばけ台を「知らない」「見たことはない」といった声が聞かれるそうです。実際に職員の方から年代を絞った資料の貸出が出来ないか問い合わせが来ましたが、当館の資料で年代が合うものをそろえるのが難しいと感じています。宮崎県の永田さんに今後ご希望の年代に沿った資料の選定など、どうされるのかをお伺いすればよかった、とあとから思いました。

\*参加者の松田さん(宮崎県)が、博物館は周りからするといろんな活用を提案できる場です。と仰っていたのがとても印象に残っています。博物館の内部にいて、資料保存や事業趣旨などから外れたものはなかなか活用しにくいのですが、外部からの刺激があると館内でもいろんな活用の仕方が広がるのでは、と思いました。

第6回

「アート活動で高齢者と美術館をつなぐ」

● 講師  
鬼本 佳代子 (福岡市美術館主任学芸主事)



● 講師から一言  
福岡市美術館が実施する65歳以上を対象とした「いきヨウヨウ講座」と、令和2年度に福岡市博物館・福岡アジア美術館とともに実施したオンラインによる高齢者向けプログラムについてお話しします。

● 開催日時  
2021年12月17日(金) 13:00~14:30(12:45~受付開始)

● 受講者数  
25名

● 事後アンケート  
本日の感想をお書きください。

\*美術館の資料は色彩豊かなので、自分の気持ちを色で表現する、思い出を比喩的に(桜や梅に投影して)描く、というプログラムがくれることを学びました。こういうアプローチの回想法もあるのだと知り、大変勉強になりました。語り場で、博物館は筑前煮のような色合いなので…と言ったら、吹田市博の五月女さんが共感してくれました。

\*最終回の福岡市美術館の取り組み発表、とても励みになりました。高齢者だけでなく、すべての人に開かれた取り組みにつながると感じました。市民の美術館としての使命から、より広く社会教育施設として、生涯学習拠点・担い手としての使命感が伝わってきました。

私自身、現在フリーランスの教育普及学芸員として福津市民向けの生涯学習システム運営に関わっているので、美術館・博物館の学芸員さんたちが「生涯学習の担い手」としての意識を高

めてくださることに、とても心強い思いがしました。

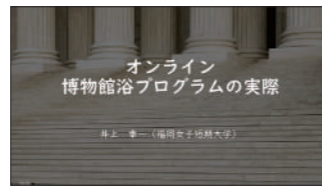
\*第6回の福岡市美術館の取り組みはとても興味深いものでした。梅と桜の作品作りは、誰もがながしかの思い出を持つであろうという課題で、回想法とともに活発に制作できると思いました。また、来年につなげるという話も回想法では過去に思いを求めるのですが、将来、未来にも思いをつなげるという事は素晴らしいと思いました。さらに、リモート講座も事前に鑑賞するものを持っていくところがすごいと思いました。とは言え、リモートが増えても、やっぱり博物館は実物主義であってほしいです。

\*今回の講座は6回とも、内容が自分の聞きたかったことに合致していて、毎回とても楽しく受講させて頂きました。特に各地の皆様を知る事ができたことが、今後の自館運営の大きな助けになると考えています。これから実際に何ができるか、少しずつではありますが進めていきます。

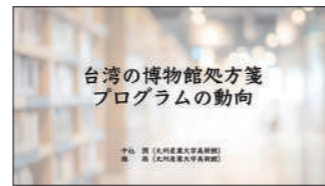
\*今回の福岡市美術館さんの取り組みについてですが、それまでの回を受講して、自分の中に、回想法は収蔵品や古い写真などを用いて行うものという固定観念が出来ていたように思います。天文台の方や、美術館の方と語り場でお話ししたにもかかわらず…。博物館等の職員は、自館の活用にはやり目が行きがちですが、最終日に、もっと自由に、大きく考えていいのだということをお話いただいたような気がします。



第1回



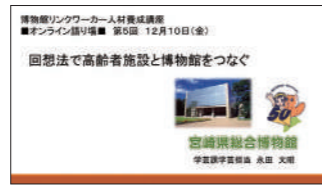
第2回



第3回



第4回



第5回



第6回

\*なかなか具体的な動きが難しい中で、福岡美術館の取り組みは内外にネットワークを作り実施されていること、素晴らしいと思いました。近辺のミュージアムが連携することで提供の内容も広がります。モデルとして今後も展開されることを願っています。このような研修会に参加させていただき感謝申し上げます。ありがとうございました。

\*講座の中でも、社会的処方という言葉がとても印象に残りました。福祉に関心があり、学生時代にヘルパー2級を取得したのですが、実習先で訪れた介護施設やデイケアサービス、自宅

介護の現場では、いつも文化やアートがあふれていました。高齢になっても、博物館や美術館に訪れてアートや文化活動を楽しむことを希望されている人は数多くいらっしゃると思います。その活動によって、社会と繋がり、健康維持にも発展していくのだと、講座を通して感じました。また、国や地域によっても実施の仕方は様々であることも分りましたので、台湾や事例をご紹介くださった館を参考に、まずは実践あるのみだと思います。私も、出来る事からコツコツと進めていきたいと思っています。

7-3

オンライン講座チラシの表と裏

回次	開催日	開催時間	タイトル	講師
1	11月12日(日)		博物館研究の最前線	緒方 真 (九州大学)
2	11月18日(日)		オンライン博物館浴プログラムの実際	井上 肇 (福岡女子大学)
3	11月24日(日)	13:00~14:30 録音版 30分 事前収録(要)	台湾の博物館処方箋プログラムの動向	中込 真 美 (九州大学)
4	12月3日(日)	* 11/19(金) 18:00~19:30	認知症高齢者と社会教育施設をつなぐ	竹下 一樹 (九州大学)
5	12月10日(日)		回想法で高齢者施設と博物館をつなぐ	森田 文雄 (福岡県博物館)
6	12月17日(日)		アート活動で高齢者と美術館をつなぐ	鬼本 佳代子 (福岡市美術館)

表面

【オンライン語り場】日程一覧

申込方法: Zoomによるライブ配信(要型30分)

申込先: 中込 真 (所長) 九州大学学芸員育成センター

お問い合わせ: 092-880-1111

裏面



語り場風景(第6回)



個人の発言風景(ブレイクアウトルーム)



## 博物館のリラックス効果に関する実態調査

(リンクワーカーがつかないだプログラム参加者への生理測定、心理測定による効果評価の調査)

### 【目的】

九州・沖縄各県で実施する「健康寿命」増進プログラム開発講座参加者を対象、心理測定(POMS、VASシート)、生理測定(血圧、脈拍、唾液アマラーゼ)を行い、プログラムのリラックス効果評価を分析判定する。こうしたエビデンスの蓄積をも

とに、地域の博物館と医療・福祉機関をつなぐリンクワーカーに情報提供できる、高齢者のフレイル予防、健康寿命を伸ばすためのプログラム研究開発に結びつけたい。今回は、以下の5会場で実施した。実施に当たり、対象者の承諾を得た。

#### 1 「博物館・美術館 de 園芸療法」

- 講師 岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）専門分野：環境健康学
- 開催日時 2021年10月8日(金) 10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 開催場所 佐賀県立博物館・美術館（佐賀県佐賀市城内1-15-23）
- 実施方法 心理測定(POMS、VASシート)、生理測定(血圧、脈拍)

#### 2 「博物館・美術館 de 園芸療法」

- 講師 岩崎 寛（千葉大学大学院園芸学研究科准教授）専門分野：環境健康学
- 開催日時 2022年3月28日(月) 10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 開催場所 宮崎県総合博物館・美術館（宮崎県宮崎市神宮2-4-4）
- 実施方法 心理測定(POMS、VASシート)、生理測定(血圧、脈拍)

#### 3 「恐竜博物館・美術館 de 音楽療法」

- 講師 井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科准教授）専門分野：音楽学/音楽療法
- 開催日時 2021年10月11日(月) 10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 開催場所 御船町恐竜博物館（熊本県上益城郡御船町大字御船995-6）
- 実施方法 心理測定(POMS、VASシート)、生理測定(血圧、脈拍)

#### 4 「恐竜博物館・美術館 de 音楽療法」

- 講師 井上 幸一（福岡女子短期大学音楽科准教授）専門分野：音楽学/音楽療法
- 開催日時 2021年11月21日(日) 10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 開催場所 三宅美術館（鹿児島県鹿児島市谷山中央1-4319-4）
- 実施方法 心理測定(VASシート)、生理測定(血圧、脈拍)

#### 5 「博物館・民俗資料館 de 回想法」

- 講師 市橋 芳則（北名古屋歴史民俗資料館長）専門分野：博物館学
- 開催日時 2021年10月15日(金) 10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 開催場所 時津町民俗資料館（長崎県西彼杵郡時津町野田郷62）
- 実施方法 心理測定(POMS2、VASシート)、生理測定(血圧、脈拍)

## 多言語学習教材開発事業

博物館が有する「守る技術(保存・修復)」「調べる技術(調査研究)」「見せる技術(展示)」「伝える技術(教育普及)」(以下、4つの技術)を学ぶために、これまで「仏像」「茶器」「掛軸」「着物」「刀剣」「甲冑」などの取り扱いを紹介する博物館学習映像教材「学芸道」を制作し、シリーズ化してきた(9項目18本)。これらは、現職学芸員、学芸員を目指す学生、そして「博物館が大好きな」高齢者の学習教材となっている。今回、こ

れらのうちから、「仏像の取り扱い方:頭部・手部」「綿枕の作り方」の計3本を英語版として多言語化することで、「いつでも、どこでも」受講可能なオンライン学習映像教材が、海外博物館、美術館などへ広く紹介できるようにした。また、外国人住民、訪日外国人にとっても、博物館の4つの技術を知る、日本文化を知る、そして博物館のバックヤードを知る教材となることが期待できる。



多言語学習教材の表紙



多言語学習教材の一場面

## 「博物館と医療・福祉のよりよい関係づくり」を進める 米国・英国博物館との交流事業

### —昨年度の交流事業の様子



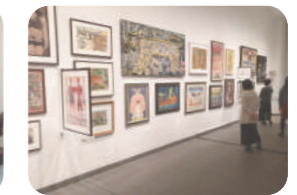
プログラム Met Escapesの様子



ホイトニー美術館 インタビューの様子



イントレピッド海上航空宇宙博物館  
インタビューの様子



アメリカンフォークアートミュージアム  
インタビューの様子

### \*新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大のため、現地調査中止



ロイヤル・スコティッシュ・アカデミー



ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー  
インタビューの様子



国立スコットランド博物館



ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー  
インタビューの様子

## 米国・英国博物館関係者を招聘した国際シンポジウム事業

今回は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)感染拡大のため、海外からの博物館関係者の招聘や参加者の国内移動が困難となったため、2022年2月12日(土)にオンラインで開催した。

### シンポジウムチラシの表と裏



表面



裏面

## 2022九州産業大学国際シンポジウム「博物館と医療・福祉のよりよい関係」

### 【開催趣旨】

博物館は地域社会で、どんな役割を果たしていけばよいのだろうか？

私たちは、そんな疑問を持ちながら、米国、英国の現地調査を踏まえ、両国から博物館関係者を招聘して、2019年に「地域社会での博物館の役割」、2020年に「博物館と医療・福祉とのよりよい関係」をテーマとした国際シンポジウムを開催した。そして2021年は現地調査ができなかったものの、「コロナ禍での博物館活動」「博物館と高齢者の健康、幸福感」をテーマに、米国と英国をつないだオンライン国際シンポジウムを開催した。

\*博物館浴:博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を入りの健康増進・疾病予防に活用する活動

我が国は、団塊世代が75才以上となる2025年を目前に、要介護状態になっても住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が急がれる。

2022年は「博物館浴と高齢者の健康、幸福感」をテーマとする。これまでの米国の現地調査を踏まえ、ニューヨークのイントレピッド海上航空宇宙博物館と、認知症患者やその家族を支援する団体から事例報告を受け、指定討論者(日本、英国)、そして日本からの参加者と一緒に考えていきたい。

### ■開催日時

2022年2月12日(土) 20:00～22:30(オンライン開催)

\*英国現地時間/11:00～13:30、米国現地時間/6:00～8:30

### ■オンライン調整会場

九州産業大学総合情報基盤センター

(福岡県福岡市東区松香台2-3-1 中央会館3階)

### ■開催方法

①Zoomによるオンラインにて、日本、英国、米国を同時中継して行う。②(株)サイマル・インターナショナルによる同時通訳で行う。同時通訳アプリ「interprefy」の使用。

### ■参加者数

120名(オンラインによる申込数149名)

### ■参加者の国際シンポジウムへの期待の声(抜粋)

○コロナ禍におけるミュージアムの存在価値として、傷ついた心身を癒す働きや、ミュージアムのコンテンツにより知的な好奇心が刺激され前向きに生きていくパワーを得られる場、などがあると考えているので、英国や米国、日本の先進的な取組を聞くことができ、共に考えられることを期待しています。

○対面でのプログラムが制限される中で、インターネットに苦手意識のある高齢者の方々に博物館の楽しみをどのように届けるのかについて、各登壇者のみなさまから伺いたいと思います。

○博物館、福祉施設、病院等の他にもコーディネーター(NPOや支援団体)や何らかの形で関わっている個人/団体がいるのかなど、どのような人々がどのように繋がって有機的に展開させているのを知りたいです。

○米国、英国、日本に共通した現状、および異なる状況について、これからどのような社会が求められていくのか、ミュージアムの立場から議論を交わすことができることを楽しみにしています。

○博物館が社会的価値をいかに形成していくか。医療や福祉との連携はそのための取り組みのひとつだと思っています。国内外の事例を勉強させて下さい。

○祖母が認知症なので、博物館で働く自分が何かできないか、日々考えています。知識も知恵もなく何もできていません。ヒントをもらえたら嬉しいです。

○普段から高齢者施設で傾聴ボランティアをしていますが、このコロナ禍で訪問ができいていません。施設の中は、面会も

できなくて、限られたスタッフでの介護となり、施設内での会話も少なく、認知症が進み入所のみさんの元気がなくなっている状況です。

博物館が、こうしたみなさんへの働きかけをしてくださるなら、とても嬉しいし、どう施設や高齢者にコンタクトを取っていただけるかを考えられたらと思います。

○私はミュージオロジーを専攻している留学生です。このシンポジウムでは、高齢者と博物館の関係を理解し、特に福祉について、現在の博物館が高齢者に何を提供できるかを考えさせていたきたいと思っています。

○私の仕事は、多様な人が美術に親しむ経験を得る機会を作ることです。異なる業種の人の考え方や、美術以外の博物館の実践を学ぶことで、自分の可能性を広げたいと思います。

○美術館教育と福祉の関係について、先進的・具体的事例をもとに思考を深める好機だと期待いたします。

○私は、草深い山裾の老健に勤務しています。富山県氷見市立博物館収蔵の貸出品(海の民具、山の民具)を使わせていただき、認知症高齢入所者のケア(長期記憶や情動への働きかけ)や地域で介護している方々を対象とした家族介護教室(介護、医療、福祉についての情報交換、リフレッシュの場)において地域回想法を行っています。民具を通して、博物館は地域の人々の叡智や心のふるさどが詰まったタイムカプセルであり、高齢者の方々には玉手箱のようだといふ頃感しております。拙い方言を操って一緒に開ける楽しみがあります。外国の、アメリカの方々の様子を拝聴するのが楽しみです。

○高齢であることに加え、コロナへの不安感から、ますます美術館・博物館から足が遠のくことが容易に想定される。「仕方ない」ではなく、美術館・博物館側からのアプローチとして何が出来るのか?を海外の事例を通して考えていきたい。

■ 開催内容

テーマ  
「withコロナにおける高齢者プログラムの取り組みと課題」

キーワード  
「博物館浴」と高齢者の健康(Health)、幸福感(Wellbeing)

【司会】  
吉田 公子 (九州産業大学美術館准教授)

20:00 開会挨拶  
緒方 泉  
(九州産業大学美術館長、九州産業大学地域共創学部教授)

20:05 事例報告1  
「with コロナ時代」における高齢者向けプログラムの取り組みと課題  
米国・イントレピッド海上航空宇宙博物館/  
シャーロット・マーティン(ディレクター・オブ・アクセス・イニシアティブ)

20:30 事例報告2  
「アートフルな交流と会話:介護者と認知症の家族とともに豊かに」  
米国・NYUランゴーンヘルス/アン・F・ブルグンダー  
(アルツハイマー病及び関連認知症家族支援プログラム/  
パディプログラム及びスペシャルプログラムコーディネーター、  
LMSW(Licensed Master Social Worker))

20:55 休憩  
(チャットで質問募集)

21:00 指定討論者からの質問  
(2020年米国調査・英国を踏まえながら)

21:20 ブレイクアウトルーム  
4人1組に分かれて、ディスカッション  
(新たな質問をチャットで募集)

21:40 休憩  
(チャットで質問募集)

21:50 質疑応答

- 22:15 ふりかえり
- シャーロット・マーティン (米国)
  - アン・F・ブルグンダー (米国)
  - ジェーン・フィンドレー (英国・ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー)
  - 鬼本 佳代子 (2020年米国調査団/福岡市美術館)
  - 中込 潤 (2020年米国調査団/九州産業大学美術館)

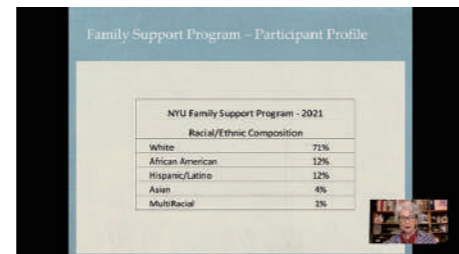
22:35 閉会挨拶

緒方 泉

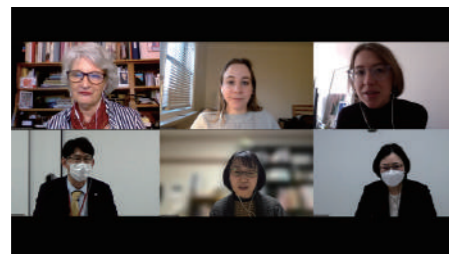
22:40 終了



シャーロット氏発表



アン氏発表



討論風景



オンライン調整会場全景

【発表趣旨】

「withコロナ時代」における高齢者向けプログラムの取り組みと課題

シャーロット・マーティン(米国)

この10年間、イントレピッド海上航空宇宙博物館は高齢者、特に認知症の高齢者とその介護パートナー向けの無料プログラムを幅広く提供してきた。これらの「内なる物語(The Stories Within)」プログラムは当博物館で開催され、ストーリーテリング、観察、さらには芸術創作を取り入れて、会話と交流を育んできた。イントレピッド海上航空宇宙博物館は、米国海軍の退役空母イントレピッド(1943～1974年就役)を拠点としており、その艦上で行うことがこうしたプログラムの重要な側面であった。

その後、当博物館はこのプログラムを拡大して、芸術の取り組みをさらに拡充し、移動の障壁を取り除いた。当博物館での「ティーダンス(Tea Dance)」プログラム(イントレピッド就役期間の音楽を使用)には参加者への無料送迎サービスが含まれ、講師が認知症ケアセンターや介護施設などに出向く出張芸術プログラムもあった。その一方で、講師は外出できない高齢者への働きかけを開始して、事前に歴史的な写真を小包で郵送し、毎週参加者と電話で交流を持った。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミックがニューヨークに到達したとき、介護施設やケアセンターは大打撃を受けた。同時に、この致死性ウイルスを感染させることを危惧して、サービスが停止されたり、家族が訪問できなくなったりしたため、自宅で暮らしている高齢者はますます孤立した。

博物館・美術館の講師はZoomで定期的にミーティングを行い、施設の閉鎖中にコミュニティへのサービスを継続するためのアイデアを交換した。こうしたミーティングとともに、高齢者、特に記憶障害を持つ高齢者に直接対応しているパートナー団体との電話での話し合いにより、当博物館がそうした人々へのサービスの継続にどのように取り組むかについて、知見を得ることができた。

電話を利用するプログラムは従来通り継続できたが、当初、講師は博物館に行けなかったため、毎回小包を郵送できたわけではなかった。講師はプログラムに説明を増やすことで対応した。さらに、当博物館は地元の公共図書館との長年に渡る関係に基づき、電話を利用するプログラムを追加で提供した。どちらのタイプのプログラムもローテクで安全な交流と学びの機会をもたらしている。

当博物館は他のバーチャルプログラムでも高齢者に働きかけを行っている。たとえば、目の見えない人や低視力の人を対象に、音声ガイド付きバーチャルツアーの提供を始めた。これらのツアーには年齢を問わず誰でも参加できるが、参加者の多くは高齢者であり、その中には加齢により失明した人もいる。

セッションはそれぞれテーマが異なり、プログラムは、対面ガイド付きで展示物に触れるツアーではアクセスが困難な博物館のエリアやトピックに焦点を合わせている。米国全土から、また英国からも参加できる。対面プログラムの提供を再開できるようになったが、引き続きこの無料バーチャルプログラムを年に4回(毎回2回ずつ)提供している。

同様に、当博物館の退役軍人プログラムはあらゆる年齢の退役軍人を対象にしているが、高齢者が参加者の大きな割合を占めており、年齢や経歴の異なる退役軍人と交流するこの機会を高く評価している。

パンデミックの間、当博物館はプログラムをバーチャルプログラムに移行した。新たに導入したプログラムに「自由に:全国の博物館にズームイン(On Liberty: Zooming into Museums Across the Country)」などがあり、自宅で過ごす休暇「バーチャルステイケーション」を目的として、このプログラムのために他の博物館と提携している。

当博物館の収蔵品だけを対象にした場合よりも多様な物語を伝え、離れた場所で暮らす退役軍人の間に交流を育むことができる。他の退役軍人プログラムは、オンラインよりも対面で実施する方がはるかに有益であるため、バーチャルプログラムを維持しつつも、対面で安全に実施できるとわかった時点で、すぐに対面に戻すことを優先した。

しかし、当博物館の最も喫緊の課題の1つは、認知症患者とその介護パートナーへのサービスの継続であり、そうした人々は孤立と活動の喪失から特に悪影響を受ける可能性があった。

今回の移行には、他の文化団体やサービス提供者、支持者との協議が不可欠であった。当博物館はZoomでの内なる物語とティーダンスの提供に切り替えた。最初の数回のプログラムの間、講師は登録者にイラスト入りのZoomの使い方ガイドをeメールで送信した。内なる物語プログラムでは、講師はバーチャルプログラムならではの機会を生かして、プログラムの間、動画や口述歴史のクリップ動画、音楽を再生するなどした。どれも博物館の大きな鋼船上では非常に難しいことである。講師はイントレピッドの元乗組員や他の専門家を招いて、対面プログラムの場合と同様に体験談を話してもらった。それによって、こうした高齢のボランティアが、当博物館との関わりと交流を維持するのに役立つというメリットも加わった。

ティーダンスの場合、当博物館は送迎用の資金を別の形での連帯感の醸成に向けることができた。各ティーダンスでは、登録者はテーマにちなんだ飾り、ダンスリボン、スカーフ、音の鳴るグッズ、軽食などが入った「ケアパッケージ」の送付を依頼できる。私たちはそうした道具をまとめて直接郵送した。司会者は同じ道具を持っており、プログラムの間それらを利用して連帯感を育むのに役立てられる。当博物館はティーダンスを博物館での実施に戻し(必要に応じてオンライン開催に戻れるようにしながらであるが)、対面とオンラインの両方で、ニューヨーク市内の認知症ケアセンターや他の施設にさらなる芸術プログラムを提供する予定である。

今後の計画を立てるに当たり、柔軟なハイブリッドアプローチが不可欠であると考えている。バーチャルプログラムと対面プログラムは、どちらもすばらしい機会と独自の課題をもたらすため、コミュニティから常時得られる情報を利用して、バランスの維持に努めるつもりである。

## 【発表趣旨】

### 「アートフルな交流と会話：介護者と認知症の家族をともに豊かに」

#### アン・F・ブルグンダー(米国)

ニューヨーク市のニューヨーク大学(NYU)ランゴーン・ヘルスのアルツハイマー病および関連認知症ファミリー・サポート・プログラム(Alzheimer's Disease and Related Dementias Family Support Program)は、アルツハイマー病や関連する認知症の患者の介護者を支援するための幅広いサービスを提供している。2020年3月に新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が流行すると、すべてのサービスはZoomによるオンラインでの提供に移行した。COVID-19の流行前、ファミリー・サポート・プログラムは、ニューヨーク市の多様な美術館・博物館と提携して、プログラム参加者向けにプライベートギャラリートゥアを毎月開催していた。

2020年4月、イサム・ノグチ庭園美術館は、ファミリー・サポート・プログラム参加者向けに3月末に予定していた対面プログラムを、すぐさまオンラインプログラムに切り替えた。これをきっかけに、美術館・博物館や他の芸術家・団体との協力のもと、介護者と認知症の家族のために「アートフルな会話と交流とともに豊かに(Artful Conversations and Connections Joint Enrichment)」と題したオンラインプログラムを毎週開催することになった。

今回のプレゼンテーションでは、COVID-19流行前、月に一度だった美術館・博物館との協力を、介護者と認知症の家族のための「アートフルな会話と交流とともに豊かに」という週に一度のプログラムに移行させた経験について説明する。

そして、プレゼンテーションでは、美術館・博物館、芸術家講師、音楽家、公立庭園・植物園と提携した芸術プログラムの企画で「学んだ教訓」を明らかにする。

ニューヨーク大学(NYU)ランゴーン・ヘルスは、ニューヨーク市およびロングアイランドの全域に施設を持つ米国有数の大学病院であり、奉仕する・教授する・発見する(serve, teach, and discover)という3つの使命を掲げている。

メアリー・S・ミッテルマン公衆衛生学博士(DrPH)の指導の下、ファミリー・サポート・プログラムのチームが実施するエビデンスに基づくサービスに対して、ニューヨーク州保健局からの5年間の補助金から資金が提供される。この補助金は、アルツハイマー病や関連する認知症の患者の介護者に支援サービスを提供することを目的としている。

ミッテルマン博士はNYUグロスマン医学部精神医学科の研究教授で、NYU介護者介入(NYU Caregiver Intervention)の研究者として国際的に評価されており、国立衛生研究所から20年間の助成を受けた。この研究は、家族介護者と認知症患者への支援がもたらす長期的恩恵を数多く実証した。

オンラインプログラム「アートフルな会話と交流とともに豊かに」の目的は、対面での美術館・博物館見学プログラムの目的を反映している。つまり、介護者と認知症の家族が一緒に楽しめる魅力的な活動を提供することで、芸術との関わりを通じて参加者の生活の質を向上させることである。COVID-19の流行を受け、孤立感の緩和と交流を持てるコミュニティの構築という目的がオンラインプログラムの中核になった。

プレゼンテーションでは、プログラムの以下の要素について取り上げる。

#### ① パートナーと協力者

オンラインプログラムに移行した際、美術館・博物館を唯一の協力者と見なしていた。しかし、COVID-19でニューヨーク市が封鎖された間、多数の美術館・博物館が休館し、講師を自宅待機させたことを受けて、評価アンケートでのプログラム参加者からの

提案をある程度参考に、プログラムと講師の幅を広げることを考えた。フリーの芸術家講師や音楽家、舞踊団や公立庭園・植物園に働きかけた。スペイン語が母語の美術館講師は「スペイン語で(En Espanol)」というマンスリープログラムを開始した。また、市の感染率が鈍化した2020年秋には、美術館・博物館の協力者が拡大した。

パートナーとのプログラムの企画：美術館・博物館、芸術家、音楽家、公立庭園・植物園、野球の専門家などにパートナー提携の依頼を始めている。たいいていは提示する作品・資料や芸術家の専門技術をベースにプログラムの構想を立てるが、最終的なプログラムはアイデアや経験の交換から生まれるのが常である。ニューヨーク市があらゆる分野の美術館や博物館、芸術家の宝庫であることを反映して、プログラムは多彩なものになっている。

#### ② 美術館・博物館・芸術家の役割とファミリー・サポート・プログラムの役割

ファミリー・サポート・プログラムはプログラムに参加者に宣伝し、登録とZoomリンクを手配し、参加者をZoomのミーティングルームに温かく迎え入れ、展示作品・資料についての講話やプログラムを主導する美術館・博物館・芸術家の講師を紹介する。

#### ③ 参加者の構成と参加戦略

COVID-19流行前の美術館・博物館のプログラムは、初期の認知症患者とその家族介護者に重点を置き、一般的にはペア8組16名を上限にしていた。自宅から参加する場合、1つのプログラムは15～20組でも歓迎されることがすぐにわかった。また、認知症の重症度は初期から中後期まで幅があった。こうして多様な参加戦略が生まれた。

#### ④ プログラムの進化

週に一度のプログラムから進化して、2つの美術館・博物館と提携し、認知症患者とその家族介護者を対象に、またレスパイトケアやセルフケアとして介護者のみを対象に、4～6週間の芸術・創作ワークショップシリーズを開催している。

#### ⑤ プログラムの費用

ファミリー・サポート・プログラム参加者はすべてのプログラムとワークショップシリーズに無料で参加できる。一部の美術館や博物館は「アクセス」プログラムのために特別資金を確保して、無料でプログラムを提供している。他の美術館・博物館やすべてのフリーの芸術家に関しては、費用の支払いや芸術家への報酬のために、ファミリー・サポート・プログラムはニューヨーク州保健局と一緒に補助金という形で少額の謝礼を提供している。

## ■ 事後アンケート

### 質問

以下の①～④について、感想(気づきや発見、気になったキーワードなど)をお聞かせください。

#### ① 米国、シャーロット・マーティンの事例報告

\*対面・オンラインにこだわらず、どちらの良い面も取りれバランスの良い方法を模索していくという点に共感しました。「認知症患者とその介護パートナーへのサービスの継続」という点が最も重要な軸だということを、運営側が共通認識として持っており、彼らのために何ができるか、ということを考えて続けた過程と結果を知ることができてよかったです。

\*孤立と喪失の克服を、博物館活動の任務だと考える気概が伝わってきた。認知症プログラムに限ったことではなく、館自体の存立を説いていると思われた。

\*プログラムをつくるにあたって、博物館、美術館といった館種間の壁がないように感じました。日本では、ついつい、館種の違いで手法を限定してしまいがちなので、使える考え方や手法は柔軟に使っていいですね。

\*コロナ禍で更なる活動を継続、進化させていることは素晴らしいと思いました。提供者が関係者と連携をとり、アイデアを出し合う、そして実行する流れがしっかり出来てきていると感じました。特徴であるティーダンスが芸術プログラムとして更なる展開を目指すとのこと、今後が楽しみです。

\*博物館関係者だけでなく、より詳しい他団体の方たちとアイデアを交換して、プログラムを作る環境を築いていることが素晴らしかったです。ティーダンスは、運動能力に応じて参加できる、完成されたプログラムで、そのような実例を知ることができ、勉強になりました。

\*博物館のプログラムがCOVID-19下の参加者の状況に応じて、バーチャルと対面の両プログラムを取り入れて柔軟に対応していることに感銘を受けた。COVID-19下における認知症高齢者とその介護パートナーの支援に参考になるものであった。特にティーダンスの登録者に応じた飾り、ダンスリボン、スカーフ、音の鳴るグッズ、軽食などが入った「ケアパッケージ」はコロナ禍における地域活動の参考にしたかった。

\*イントレピッド会場航空宇宙博物館で、米国海軍の資料を利用して高齢者向けのプログラムを行っていらっしやると言うお話でした。様々な試みにより、多くの方が楽しみを得ている

ことが分かりました。Zoomや小包での郵送を利用したプログラムなど、コロナ対策のために様々なアイデアを出されて実行されている姿に感動しました。

\*今回の講演で認知症患者の博物館ワークショップを紹介されていたが、患者とその家族対象という事に感動した。介護家族の心身のケアまで考えていることが素晴らしいと思った。コロナ禍を良い方向に活用して、患者と家族のためのZoomによるワークショップの開催は会話が不足しがちな患者とその家族に大きな効果を生み出したのではと思った。老父母を看取り、老義父母を看取り、主人を介護中の私であるが、患者と家族を考えたプログラムはぜひとも参加したいと思った。

\*ティーダンスについて、タクシーによる無料の送迎が付いている等、参加しやすい体制が整っていることに感心しました。

\*退役軍人向けのプログラムのことなど、アメリカならではの話題が聞けて大変興味深かったです。また、博物館が、様々な世代の兵役経験者が集って経験を分かち合える場となっていることにも驚きました。

#### ② 米国、アン・F・ブルグンダーの事例報告

\*コロナが沈静化していた夏頃にはプログラム参加者が少なくなり、オミクロン株が蔓延し始めた頃に参加者が増えたという点については社会情勢を反映していて興味深いものがありました。また、プログラム参加希望者が増えても、それぞれと密にコミュニケーションを取ることを妥協してでも、多くの方とつながりを得るといった目的のために参加を断らずにプログラムを実施する方向へ進めた点はとても素晴らしいと思います。自身の業務においても、状況によってプログラムの内容や実施方法を変更できる柔軟性(とそれが可能な周りとのコミュニケーション)を持ちたいと思いました。

\*イントレピッド海上航空宇宙博物館は、多くの観光客の利用もあり、それらが館の運営を支えている側面もあると思われるが、それだけにとられないプログラムの提供を考え続けているということに気づかされた。今回の発表は市民へ提供するプログラムとして、今回は高齢者を対象とした「健康」に関わるものであったが、おそらくターゲットは多岐にわたると考えられる。社会的課題の解決に寄与する博物館となっていくためには、多様な利用者の多様なニーズに対応しようとする発想が大切であり、ひとつの課題解決に特化することではないのだろう…と考えました。

\*参加者の"engagement"がプログラムを貫く価値観と感じました。アンさんのようなキャリアの方のお話は初めてでしたので、興味深く拝聴しました。シンポジウム後にメールで質問をさせていただいた際にも、丁寧にお返事をいただきました。

\*米国有数の大学病院がサポートしているプログラムであること、州より補助金が提供されていることは理想的な背景だと思います。認知症に特化しているため、ご本人や家族介護者のニーズも把握し、介護者を対象にしたプログラムも開催されていることはとても大事なことだと思います。エビデンスを構築され、世界のモデルができると良いと感じました。

\*オンラインでの活動でも、参加者は孤独感を取り払ったり、深い記憶に触れることができ、介護にあたる家族にも良い影響を与えられ、良い連鎖だと感じました。

\*「アートフルな会話と交流でともに豊かに」の目的のもと、介護者と認知症の家族と一緒に芸術との関わりを通じて、楽しみかつ生活の質を向上させる取り組みがあることを初めて知った。とても素晴らしい取り組みだと思った。また、COVID-19下の厳しい状況にありながら進化&深化している博物館の取り組みに感動した。バーチャルで行うことによっての参加者数の増加、対象となる認知症の重症度の拡大、実施回数増加など、今の時代に即した戦略が参考になった。ただ、すべて無料で参加できるための資金の確保は大きな課題であると感じた。

\*介護者や認知症のご家族のケアとして多方面の協力を得ながら支援プログラムを行っていらっしやると言うお話、素晴らしい試みだと思いました。すでに、福祉施設と博物館のみに留まらず、ダンスや音楽、果てには野球など、分野を問わず楽しいことを柔軟に取り入れていると言う事実、驚きました。日本との規模の違いにただただ目を見張るばかりですが、「楽しみ」と「感性」に働きかけることの大切さを改めて感じました。

\*シャーロットさんの報告同様に患者ファミリーを対象としている事に素晴らしいと思った。また、継続して参加できるような仕組みも素晴らしいと思った。オンラインプログラムでは、アーティストや専門家も一緒に参加できるようになっていたのが、人間関係の広がりもあって素晴らしいと思った。

\*博物館で行うイベントで「ダンス」や「音楽」を取り入れるというのが新鮮でした。

\*博物館の外側にも連携を持っていたり、認知症に関して有効性が認められ資金を得られていたり、日本と比べて理解が得られた状態で、活発に博物館浴活動が行われていることが分かりました。一つの成功例を伺うことで「博物館浴」に対して実感がわきました。

#### ③ シンポジウムの質疑応答

\*ニューヨーク大学ランゴーン・ヘルスのファミリーサポートプログラム…、このようなプログラムが国内ではどこにあるのか? 認知症関連だけでなく、他の様々な支援プログラムがあると思われるが、アンさんのような立場の方は日本ではどこにいらっしやるのか…(大学?)。エビデンスに基づくサービスに対して公的資金が提供されるということなので、医療や公衆衛生学の立場から博物館・美術館と提携したプログラムを開発・検証する必要があるのだろう。

\*クリエイティブやアートという概念に対して構えて考えていないところが、実は大事なことも知れないと感じた。  
\*評価については、ジューンさんからもお話がありましたが、プログラムの評価と助成先が求める評価のミスマッチは、今後課題として出てくると思いました。

\*プログラムの対象となっている方と自身の年齢差や経験の差をどのように捉え、どのようにその差を埋めているのでしょうか。これは、私どもの博物館で慰霊展や平和学習を行う時に同じように悩んでいることです。実際に経験しておらず、文献や映像の知識だけで企画展を作成しても、本当にそれでいいのかといつも疑問を感じているところです。

\*イベントにおいてどのように参加者の発言を引き出しているかを知ることができ、とても参考になりました。また、アート鑑賞や音楽は参加者の記憶を思い起こさせるトリガーとなることが分かりました。

\*事後アンケートでは評価を10段階に細かく分けていることに驚きました。また、そのアンケートが博物館浴への理解を促進するための材料となっていることもよく分かりました。

\*どのような状況にあっても参加できる雰囲気づくりの一環として、参加形態の選択(対面かオンラインか)も視野に入れていることが分かりました。オンラインでの実施を、普段参加できなかった方が参加できる機会になると前向きに捉えられていることがすごいいました。

\* イベントにおいてどのように参加者の発言を引き出しているかを知ることができ、とても参考になりました。また、アート鑑賞や音楽は参加者の記憶を思い起こさせるトリガーとなることが分かりました。

\* 事後アンケートでは評価を10段階に細かく分けていることに驚きました。また、そのアンケートが博物館浴への理解を促進するための材料となっていることもよく分かりました。

\* どのような状況にあっても参加できる雰囲気づくりの一環として、参加形態の選択(対面かオンラインか)も視野に入れていることが分かりました。オンラインでの実施を、普段参加できなかった方が参加できる機会になると前向きに捉えられていることがすごいいいと思いました。

④ 今後の活動

\* 私の勤める博物館の常設展示に来られる方は比較的高齢の方が多くですが、彼らはどちらかというと健康で自分で歩き回ることができる人達です。そうではなく、博物館に来られない方、介助者が必要な方々へどのようなアプローチができるのか、ヒントをいただきました。また協力してくれる人々の広いつながりを作ることの重要性をグループディスカッションでも実感しましたので、今後そういった点を業務に組み込んでいきたいと考えます。

\* コミュニケーション系の活動の課題とゴールの設定を、博物館の全活動を網羅するものとして捉え直してみたい。プログラム開発にあたり、専門ベースとしながらも外部の人とアイデア交換する姿勢をまねして追いつきたい。

\* ソーシャルワーカーの方たちを含めた研究会を始める予定です。実践と理論、両方をお互いに学んでいけたらと思っています。

\* 他団体との取り組みをポジティブにとらえられる組織づくりと、例えば昔の道具や方言などを用いて、高齢者と子供たちを繋げるような取り組みが出来たら面白いと感じました。

\* まずは、担当する認知症ケア論や老年看護学の授業において、海外での取り組みとして学生に紹介したい。また、地域のケア推進会議のメンバーでもあるので、今回のシンポジウムで知れた情報を提供し、わが市でも取り組めることについて話し合いたいと思った。

\* 町内の高齢者を対象とした企画展を考えたいと思っています。初めての試みなので、まずはどこかの福祉施設と関係を

構築し少人数の方を対象にして、回想法の様な方法で高齢者が楽しむことを優先とした小さなプログラムを考えています。その中に音楽や芸能、館内資料を用いながらも、それだけに固執しない方法を幅広く取り入れていきたいです。

\* 弊館では来館者の誰もが一度は目にした、手にしたことのある生活に密着した展示品を並べています。誰にでもある幼少期から現在までの思い出を掘り起こすことで、今回学んだような取り組みが行われる際に利用してもらえるように、展示品に何らかの手段で背景情報を付け加えるなど工夫をしたいと思います。

\* 集まった人に対して名前をよび、アイスブレイクをすること。職場では、いつも「みなさんこんにちは」で済ましていて反省した。応えたくないひとはパスしてよいなど、リラックスして参加できる場をつくることも参考になった。

\* 私自身まだ学生ですが、博物館という場で何かイベントを開催するとしたら、どこにいても、どのような病気の状態でも参加できることを前提とした企画をしたり、音楽やダンスを積極的に取り入れてみたいと思います。また、その際に、介護者も一緒に楽しめる方法(オンライン参加のサポートも含めて)を考えるべきだと思いました。

\* ブレイクアウトルームでのディスカッションで、日本ではまだ博物館と介護施設等との連携が取りづらい(互いにどのようにアクセスすればよいか分からない)という現状があることが分かったので、この問題を緩和するような取り組みができたら良いと思いました。

\* 日本でも「美術館・博物館と高齢者と医療の関係」が注目され始めた。高齢者の健康と幸福感にどれくらい効果があるのか。医学的にも証明されると研究の成果が出てくる。やはり医療関係者に参加してもらい、テーマを決めて、お互いの立場からの意見を聞く機会がほしい。今回のグループ討議で、隣町の介護施設職員と話せた。これから疑問を持ったことについて聞いてみたいと思っている。

コラム

博物館で、リラックス効果がある？

九州産業大学地域共創学部教授 緒方 泉

現代社会はストレス社会と言われる。それがコロナ禍でさらに深刻化している。

日本赤十字社は全国の高校生・大学生を対象に、「2020年4月の緊急事態宣言発出から2021年9月の緊急事態宣言解除までの期間に起きた心の変化」について、インターネット調査した(2021年)。

その結果、「コロナ禍で生じた気持ちの変化」について、「何もしたくなくなる、無気力(高校生43%/大学生49%)」「孤独を感じ1人であるのが不安(高校生28%/大学生35%)」で、約30%以上が無気力で、孤独感にさいなまれていることが分かった。

博物館は、こうした状況下において、地域社会で果たせる役割はあるのか？

2018年度の文部科学省「社会教育調査」によると、国民の年間博物館利用回数は「1.1回」。全国には5,700を超える博物館があるが、何とも低い数字である。

では、国民の博物館に対するイメージはどんなものなのだろうか？

「知識を増やすところ」「新しい発見があるところ」「癒しを得るところ」「ちょっと敷居が高い」など、いろいろな答えが聞こえてくる。

海外を見ると、カナダの医師会は2018年10月から、患者の健康回復を促進する治療の一環として、美術館への訪問を「処方箋に書く」取り組みを始めている。医師会とモントリオール美術館が連携し、心身にさまざまな健康問題を抱える患者とその家族などが、無料で美術館に入館し、芸術文化の健康効果を楽しむようにした。こうした取り組みは、2021年9月からベルギーでも実験的に始まっている。

また、イタリアのローマ・トレ大学の研究グループは、血圧と脈拍という生理面から、現代美術と具象画の鑑賞前後の変化を調べた。その結果、具象画を鑑賞したグループは収縮期血圧(最高血圧)が有意に低下したと報告している(2018年)。

国内の動きはどうか？文化審議会が「文化芸術推進基本計画(第1期)」について(答申)「(2018年)で、「博物館、美術館、図書館等は、文化芸術の保存、継承、創造、交流、発信の拠点のみならず、(中略)教育機関・福祉機関・医療機関等の関係団体と連携して様々な社会的課題を解決する場としてその役割を果たすことが求められている」と提言した。注目したいのは、博物館が「健康の場」「社会的処方場」として新たな価値創造を始めることを期待していることだ。

筆者は、科研費採択を受け、「博物館浴(博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果の人々の健康増進・疾病予防に活用する活動)」によるリラックス効果の方策研究を進めている。具体的には、

博物館や美術館で作品鑑賞前後に、生理測定(血圧、脈拍)、心理測定(気分の状態を評価するPOMS)を行い、リラックス効果を検証する。

「博物館に来ると、落ち着く」「この絵を見ていると、気持ちいい」などは、主観的な評価だが、生理・心理測定から科学的データを蓄積することで、博物館のリラックス効果を客観的に評価できる。

今回は、対象を中学生・高校生に限定し、博物館浴によるリラックス効果を明らかにすることを目的に、九州国立博物館、福岡市美術館などで実施した実証実験を紹介したい。

九州国立博物館では、参加者が鑑賞前に、心理・生理測定をして、4階文化交流展示室の旧石器時代から11世紀までの考古・歴史美術資料を各自30分鑑賞した後、再び測定した。データ分析をしたところ、POMSで「怒り」「混乱」「抑うつ」「疲労」「緊張」は下がり、「活気」は上がった。「血圧」「脈拍」はともに下がった(表参照)。

また、福岡市美術館では、鑑賞前に、心理・生理測定をして、**A古美術**、**B現代美術**、**C近現代美術**という3つの異なる展示室に分かれ、各自30分鑑賞した後、再び測定した。それぞれの展示室の内容を紹介すると、**A古美術**は「江戸時代に禅の教えを書画で伝えた仙崖の作品」「色鮮やかな螺鈿、蒔絵の作品」「お寺の雰囲気を感じる空間に並ぶ仏像」、**B現代美術**は「田部光子展」に並ぶ九州派時代から現在までの作品」、**C近現代美術**はコレクション展で、ダリの「ポルト・リガの聖母」、ウォーホル「エルヴィス」、大浦こころ「水に浮く人2」、インカ・シヨニバレCBEの「桜を放つ女性POMS」など、絵画、立体作品が並ぶ変化に富んだ空間だった。

「混乱」「緊張」「血圧」はすべてで下がった、「活気」はすべてで上がった。「怒り」「抑うつ」「疲労」と「脈拍」は展示内容によって違いがあった(表参照)。

さらに、得点が低いほど、「気分・感情状態が良好なこと」を示すPOMSのTMD値は、九州国立博物館、福岡市美術館共に下がった(表参照)。

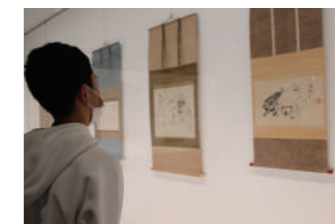
参加した高校2年生は、「今回、「博物館浴」という言葉を初めて聞いたのですが、体験してみても本当にリラックス効果を感じ、とても楽しい時間を過ごせました。今後、気分がすぐれなかったり、疲労がたまっていると感じたりしたときは、森林浴や博物館浴を取り入れていきたいと思っています」と感想を話した。

今回の実証実験から、コロナ禍にある中学生・高校生のメンタルヘルス対策として、「博物館浴」の有効性が示唆された。

今後も、博物館、美術館で行う世代別の実証実験回数を増やし、科学的データの蓄積を図ることで、「今日は博物館でリラックスしよう!」という気軽な博物館浴ファンが増えることを期待したい。



生理測定(福岡市美術館)



見学風景(福岡市美術館)

表1 九州国立博物館と福岡市美術館のPOMS「抑うつ-落ち込み」の比較 \* : p<0.05

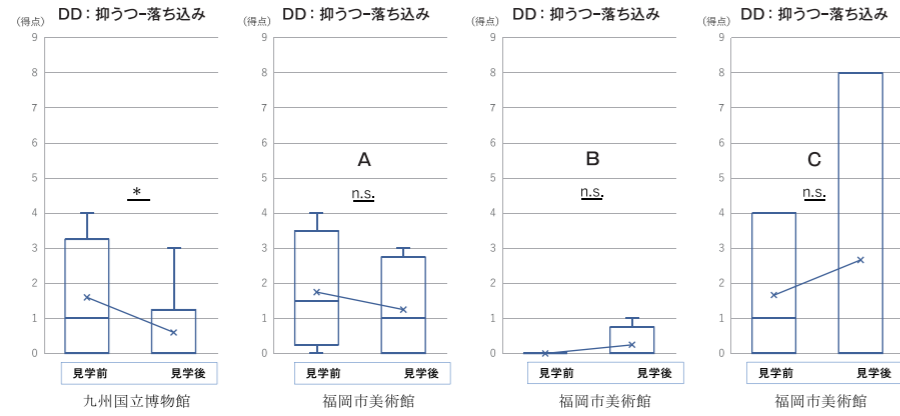


表2 九州国立博物館と福岡市美術館のPOMS「緊張-不安」の比較 \* : p<0.05

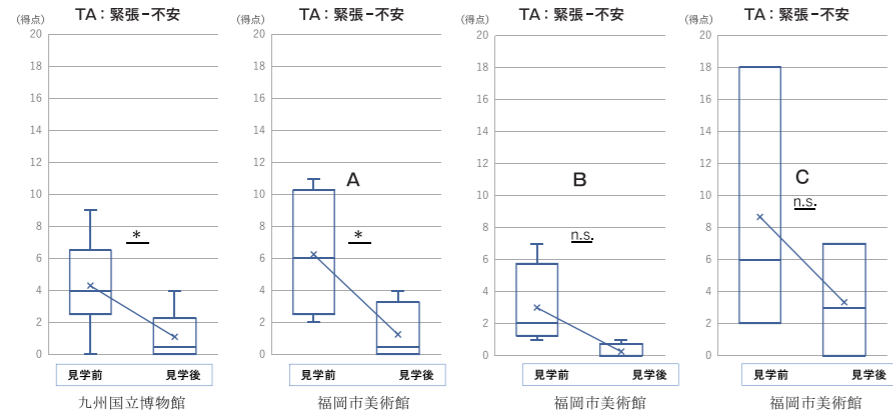


表3 九州国立博物館と福岡市美術館のPOMS「活気-活力」の比較 \* : p<0.05

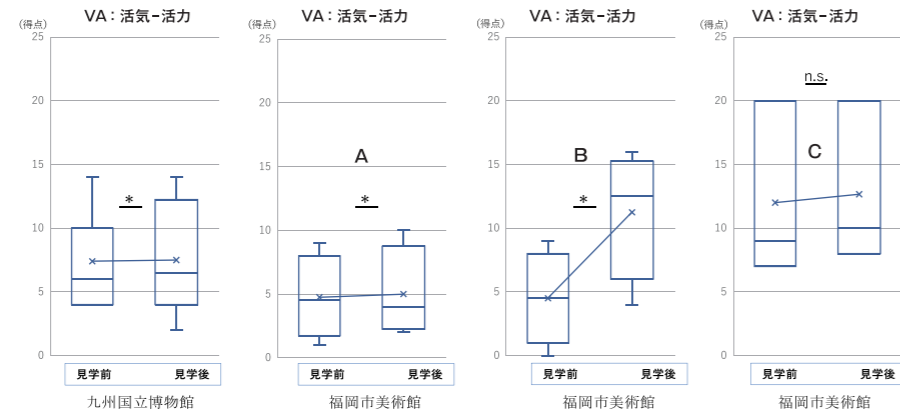


表4 九州国立博物館と福岡市美術館のPOMS「総合的気分状態」の比較 \* : p<0.05

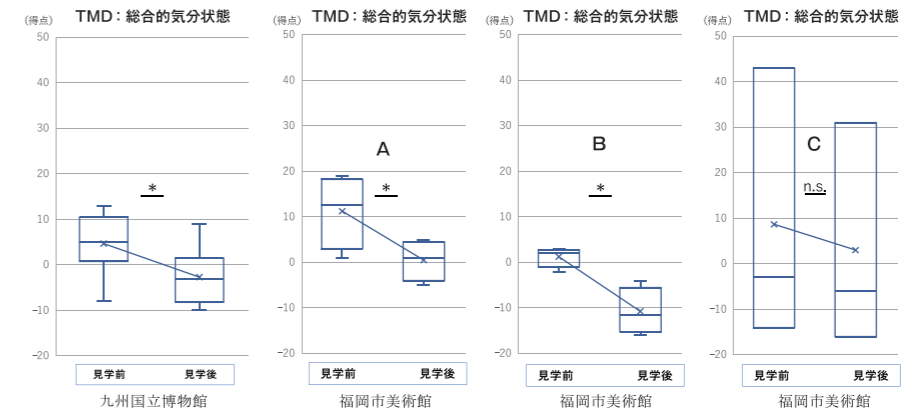


表5 九州国立博物館と福岡市美術館の「収縮期血圧(最高血圧)の比較」 \* : p<0.05

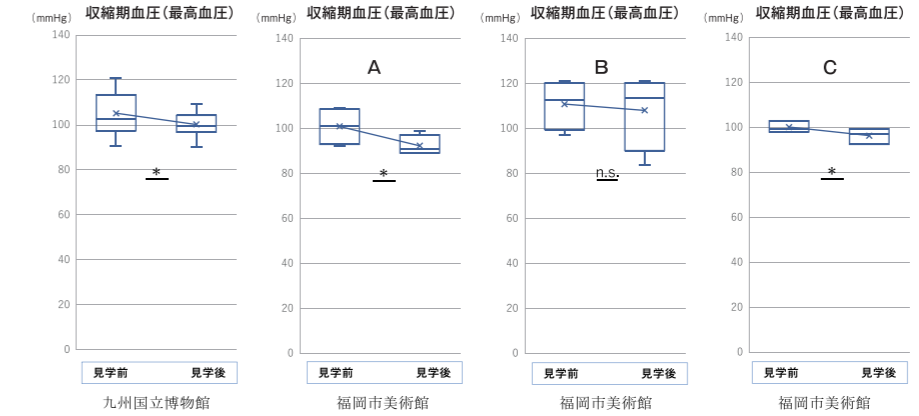


表6 九州国立博物館と福岡市美術館の「脈拍」の比較 \* : p<0.05

